
リトルバスターズvs古河ベイカーズ

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズvs古河ベイカーズ

【Nコード】

N7837M

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

リトルバスターズと古河ベイカーズが闘うiｆストーリーです。

リトバスSS

「理樹、次の試合が決まったぞ」

男子寮の一室。僕と真人の部屋に入ってきた恭助は開口一番そう言った。

「・・・試合？」

「勿論。俺達リトルバスターズの試合だ」

リトルバスターズとは幼馴染で結成した悪を滅ぼす正義の味方のことだったが、

今は草野球チームのことである。前回の部長達のチームとの試合から一カ月、次の試合が決まったようだ。

「ふ。ついにこの俺の筋肉の出番のようだな」

部屋で筋トレをしていた真人は腕を組み、言った。

さつきまで筋トレをしていたからか、真人の体からは汗が流れ出している。

「それで恭助、どのチームと試合するの？」

「それはまだ秘密だ」

「秘密？」

「ああ。だが、強敵であるのは間違いない」

「ふ。俺の筋肉の出番のようだな」

「理樹、他のメンバーにも伝えといてくれ。練習再開だ」

放課後、僕達リトルバスターズの面々はグラウンドに集った。

「というわけで、我々リトルバスターズの試合が決定した。試合は一週間後だ。」

各人これまで以上に練習に励むように」

恭助はそれだけをメンバーに伝えた。

「・・・恭介さん」

美魚は落ち着いた口調で自分の発言権を求めた。

「どうした、西園？」

「肝心の相手チームのことを聞かされていません」

「・・・ああ。相手は隣町の草野球チームだ。なんでも隣町で無敗を誇り、あまりに強過ぎて試合相手に困っていたらしい」

恭助は手を前に翳しポーズを決めた。

「それで俺達リトルバスターズの出番というわけだ。その無敵のチームを破り、俺達が最強の座を手にする」

「ま。相手が誰でも俺がいる限り我がリトルバスターズに敗北はない」

腕にギプスをし、ジャンパーを着た謙吾は言い放った。いかにも謙悟らしい頼りになる台詞だ。

「そうそう。この筋肉がある限りうちに負けはないぜ」
真人が続いて言う。

「お前はせいぜい皆の足を引っ張らないように隅っこで筋トレでもしている」

謙吾は皮肉を込めた口調で言った。

「それはどういう意味だよ、げんごっち」

「言葉通りの意味だ」

「なんだよ。じゃあ、お前の筋肉は大きすぎてチームのお荷物だから、せいぜいでしゃばらないで隅で大人しく筋トレでもしていてください、とでも言うつもりか？」

「その通りだ」

二人は互いを睨み合う。

この二人の喧嘩は日常茶飯事だ。僕達が幼馴染になり、悪を滅ぼす正義の味方、リトルバスターズを結成してから、この二人はいつもいがみ合っていた。

二人は憎みあっているわけではなく、ただ対抗心が強いだけなのだが。

「そこまでだ。二人達」

恭介が止めに入った。

そう、この二人の喧嘩を止めるのは昔から、いつも恭介だった。

「ルールに則ってもらおう」

僕達は恭介の提案により、いがみ合いをバトルランキング制という、それ自体を遊びにした。恭介が携帯でメールを打つと、二人の周りに野次馬が現れた。

その野次馬から、武器を投げ込んでもらい、無作為に手に取った道具で闘おうというものだ。勝者は敗者に称号を与えることができる。

「こいつだ」

「こいつにするぜ」

野次馬から投げられた道具を、二人は手に取った。

謙吾が手に取ったのは歯ブラシ。

真人が手に取ったのはティッシュペーパーの箱だ。

「毎回思うんだが、これでどうやって闘うの？」

真人は恭介に尋ねる。

「本来の使用方法で闘うこと」

恭介はそれだけを告げた。

「ふん。やるしかあるまい」

「ああ。やってやるぜ」

謙吾の攻撃。

謙吾は勢い良く真人の歯を歯ブラシで磨き上げた。

真人の歯が綺麗になった。

真人の攻撃。

「とういうか。これでどうやって攻撃するんだ？これつけて殴っていい？」

真人は恭介に尋ねる。

「駄目。本来の用法で闘うこと」

真人は謙吾の鼻にティッシュを当てた。謙吾は勢い良く鼻をかんだ。謙吾はすっきりした。

お互い決定打のないまま、時間ばかりが過ぎた。

「タイムアップ。引き分けだ」

恭介はそう告げた。

「ち。命拾いしたな」

「お前こそ、な」

まあ、お互い怪我がなくてよかったよね。

僕はそう思った。

僕達は練習を始めた。僕はバッターボックスに入る。

マウンドに立つのはピッチャーの鈴。その後ろには無数の猫。

「理樹、行くぞ」

マウンドの鈴は振りかぶった。

「いいよ。鈴」

僕はバットを構えた。

「行くぞ」

鈴は高く足を上げ、

「真ライジングニャットボール」

球を投げた。

練習の小休憩、女性陣が集まっている。

女性陣の会話が聞こえてきた。

「来ヶ谷さん」

「どうした。美魚君」

「来ヶ谷さんは恋をどう考えられますか？」

そう美魚が切り出した。

「いつもそうだが、唐突だな。君は」

「来ヶ谷さんほどではありません」

多少引つ掛かる所があったようだが、来ヶ谷は話を続ける。

「美魚君は恋をしているのか？」

「いえ。ただ、そういう物事に興味があるだけです」

「恋って英語でなんて言うんでしょうねえ。やっぱりloveでし
ようか」

クドが疑問符を浮かべる。

「こい？ああ。あれな。あれはうまいな。猫も好きだぞ」

肩に乗せた猫をいじりながら、鈴。

「鈴ちゃん違うよぉ〜それは魚だよ〜」

と、小毬。

「じゃあ、恋ってなんだ？」

「う、うーん口で説明するのは難しいね。・・・ようは、相手の人
のことが好きってことかな」

「あたしは子毬ちゃんのこと好きだぞ。じゃあ、これは恋だな」

「それは違うよぉ〜」

「違うなと思います」

美魚は小毬が否定するとそれを強く否定した。普段美魚が取らない
態度に一瞬場が止まる。

「いえ…。同性でも恋はするものだ」と

「まあそうですね。あたしも姉御にドキドキさせられることあるし」

と、葉留佳。

「ほう。それはどういう時だ？」

「この前姉御のティーセット壊した時なんて心臓がドキドキ。ほん
とバレなくて良かった」

「やはり貴様か」

「はっ」

突如気付いた。

「なにいつてんですか、姉御。あたしがそんなことするわけ」

「問答無用」

「ぎいやああああ」

稲妻のような衝撃の元、葉留佳は彼方へ吹き飛んだ。

「思うに美魚君。恋というのはそれをしている本人にしかわからないものだと思うぞ」

「まあ…そうですね」

美魚は皆に向き直り。

「皆さんには想いを馳せている殿方はいらっしゃるのですか？」

「想いを馳せる？それはどういう意味だ？」

首を傾げながら、鈴。

「気になるやつはいるか？という意味だよ。鈴君」

来ヶ谷は説明した。

「あーあれな…。あたしはいるぞ」

「どのような方ですか？」

美魚は尋ねた。

「頼りない奴だ」

鈴は腕を組みきっぱりと言い放つ。

「だが、あたしの手伝いをしてくれたり、頼りになるところもある。なかなか良い奴だ。小毬ちゃんはどうなんだ？」

「ふえ？私？えーと、私はね。一緒に屋上でお菓子を食べてくれる、優しい人かな」

「屋上？」

「な！なんでもない。なんでも」

一同の疑問を小毬は打ち消す。

「来ヶ谷はどうなんだ？」

「私か…。まあ、弟みたいな奴だ。放っておけない」

「クドはどうなんだ？」

「私ですか！…そうですね。一緒にテスト勉強をしてくれる人ですかねえ」

「私は？私は？」

さつき吹き飛んだ葉留香だが、いつの間にか戻っていた。

「なんだ葉留香。生きてたのか」

「私はですね。私と手をつないで風紀委員から逃げてくれる人ですね」

「なんだか、皆さん同じ人物を指しているような気がします」
美魚はそう評した。

皆が誰の話をしているか、僕にはよくわからなかったが、微笑ましい状況だと思った。

その後も皆良く練習した。

「恭介は好きな人とか、いないの？」

僕は恭介にそう訊いた。昔からそうだが、恭介はモテた。そのルックスの良さから、上級生、下級生問わず、告白された回数は数え切れない。だが、特定の女性と付き合ったという話を聞いたことがなかった。

「どうしたんだ、理樹。急にそんなこと訊いて」

「……うん。さつき女の子達がそういう話をしていたから。それで

……」

「そうか。ついに理樹も恋に目覚めたか」

恭介は感慨深げに言った。

「……好きな奴か。ああ。いるよ」

恭介に好きな人がいるなんて初耳だった。
不躰だとは思ったが僕は訊いてみた。

「どんな人？」

「理樹：お前だ」

「え？」

まるで体中の血液が顔目掛けて逆流してきたかのように、僕の顔は耳まで真っ赤になった。

「なにいつてるんだ恭介、た、たしかに、僕も恭介のこと好きだけど、僕達、その友達だし、その、それ以前に僕達は、その、あの男だし……けど、恭介なら……」

「お前だけじゃない。謙吾も真人も鈴も、俺はリトルバスターズの皆が好きなんだ」

恭介は構わず、続けた。

「……なんだ、そういうことか。」

って何僕はがっかりしているんだ。ああ。もう。

僕はがむしゃらに髪をかきむしった。

「直枝さん」

僕は恭介と別れてから、美魚に呼び止められた。

「恋に性別は関係ないと思いますよ」

美魚はそれだけを告げ、踵を返した。

「恭介の好きな奴？」

謙悟は首を傾げた。

「うん。恭介に訊いたんだけど、はぐらかされた」

僕は謙吾と真人に訊いてみた。

「案外、筋肉関係じゃねえか」

真人は言った。

「それは流石に真人だけだよ」

僕は嘆息した。

「さあな。小学生の頃から俺達と一緒にいたが、そういう話は聞いたことがないな」

と、謙吾。

「謙吾は、よく告白されたりしたよね。誰か気になったり、付き合ったりしてみようと思ったことはないの？」

僕は謙吾に尋ねた。

「まあ、俺は剣道一筋だったからな」

「俺も筋肉一筋だったからな」

真人は謙吾に続いて言った。

「そもそも真人は告白されたことないでしょ」

僕はそう指摘した。

「……俺だって、告白されたことの一回や二回……」

真人は指を折り数え、

「うおおおおおねえええ」

突如気づいたように叫んだ。

「理樹、理樹は告白されたことあるのか？」

真人は慌てたように僕に尋ねる。

「え、ああ。前に一回だけ」

「うおおおおお。俺の筋肉が足らなかったっていつのかよおお」

真人は叫ぶ。

むしろその筋肉が足りすぎているのが問題だと思うんだけど。

「なにやってんだおまえ等？」

そこで鈴がこちらにやってきた。

「頼む！鈴。俺に告ってくれ」

真人は鈴の肩を掴み、懇願した。

次の瞬間。

鈴のハイキックが絶妙な角度で真人の首に炸裂した。

「馬鹿兄貴の好きな奴？」

鈴は首を傾げる。

「ああ。恭介が誰のこと好きだか、知りたいんだけど」

友人の僕達にはわからなくても、妹の鈴にならわかるかもしれない
と思い、僕は鈴に訊いてみた。

「うーむ。きょーすけの好きな奴か」

鈴はしばし腕を組み、悩み。

「いないんじゃないか？」

そう、答えた。

「奴はもつと別のことに興味を持っているような気がする」

「……そうか。ありがと。鈴」

僕に答えた答えは、別にはぐらかしたわけじゃなく、本心からそう
思っていたような気がした。

その後も、僕達はよく練習した。

そして、一週間後。

試合当日。

早朝。僕達は隣町の学校のグラウンドに集合した。

桜並木を通り、坂を上った所に、相手の学校があった。

「ついにこの時が来たか」

恭介は感嘆とし、そう呟いた。

「ああ。俺の筋肉もさつきからうなりっぱなしだぜ」

「わふー広いグラウンドです」

各人は各々の胸中を口にする。

僕達の目の前には整理されたグラウンドが広がっていた。

天候も良く、絶好の試合日和である。

既に相手チームはウォーミングアップを初めているようでこの反
対側のダイヤモンドの上では白球が飛び交っている。

ここからでは遠くで良くわからないが相手の体格は僕達とあまり変

わからないように見える。無敗のチームと聞いていたので、もっと大柄のチームを想像していた。

「はい。彼女達」

この学校の生徒だろう男が僕達に（というか女性陣）軽々しく声をかけた。金髪をした、軽薄そうな男だ。

「変わった制服だね。どこの学校？」

「なんだこいつは」

来ヶ谷は嘆息する。

「なんか真人みたいな奴だな」

鈴は腕を組み、そう言った。

「ふん。俺の筋肉をそんなひ弱な筋肉と一緒にするな」

「馬鹿っぽいところがそっくりだ」

「今暇？そこにコーヒーの飲める静かな所があるんだけど」

男は構わず続ける。

「なーに馬鹿なことやってんのよ。あんたは」

声と同時に男に『何か』が投げ付けられる。『何か』は男の頭部に直撃し、昏倒させた。その『何か』とは猪の子供だった。

「前の試合でヒット一本打てないでエラー連発してたあんたが遅刻してくるなんて良いご身分よね」

「……くっ藤林杏……」

地面に這いつくばった男は忌々しげに呟く。

ロングヘアーの活発そうな少女 藤林杏は投げ付けたウリ坊を回収した。

「ごめんね。痛かったでしょ。ボタン」

「痛かったのは僕の方だったの……」

「なに？なんか文句ある？」

倒れている男の頭部に杏は足をあて、ドリルのように回転を加えつつ踏み付ける。

「いえ……。なにもありません」

僕はその光景を呆気に取られたように見ていた。

「あの…。これどうぞ」

「ふえ？私に？」

この学校の生徒だろうか。小学生と見間違えかねない小柄な少女が小毬に木彫りの彫刻を渡した。

「はい。どうぞ」

「わー。ありがとう。かわいいお星様だねー」

「いえ。ヒトデです」

「ふえ…ヒ、ヒトデ！」

小毬は目を丸くした。

少女は小毬の髪飾りを注視し、

「……あなたの髪についているのはヒトデですか？」

「ふえ？」

「とてもかわいいです！」

「え？えー！」

小毬は困ったような声を上げる。

「ヒトデじゃないんですか？」

「え。あー。ヒトデかな」

小毬は苦笑しながら答えた。

「あなたにもどうぞ」

「あたしか？」

少女は鈴にヒトデを渡す。

「はい。どうぞ」

「うん。ありがとな」

「えー！あたしはないの？」

と、葉留香。

「欲しいんですか？」

「うん、だって、手裏剣みたいで投げて遊ぶと面白そうじゃん」

「岡崎さんみたいなこと言わないでください。最悪です」

「え？だつてそれ手裏剣じゃないの？」

「真正正銘のヒトデです」

「…真正正銘のヒトデは海にいるものですよ」
そう美魚は指摘した。

「とにかく、風子が心を込めて作ったんです。大切にしてください」

よく見ると風子という少女の手は包帯でぐるぐる巻かれている。

木を彫る時、誤って手を傷つけたのだらう。

「えー。けどヒトデって海にいるあの気持ち悪いやつでしょ」

「そんなことはありません。とても可愛いです」

言つて、手に持っているヒトデの彫刻を胸に当てた。

「こう。胸に当てて抱きしめると・・・」

すると、少女 風子は『ぽわぁ』と恍惚とした表情をしたまま、どこか遠い世界に飛び立ってしまった。

「……もしもし？やつぽー？生きてますかー？」

葉留佳は風子の顔の前を手で仰いでみた。しかし、風子は反応しない。

「よし。つねってみよう」

「よしなよ。葉留佳さん」

「いいじゃん、理樹君。気づくって普通」

葉留佳は僕の制止も聞かず、風子の顔を軽くつねった。が、反応がない。

「もしや。ほんとに死んでる？」

「けど、息はしてるよ」

風子の鼻先からは、確かに呼吸が感じられた。

「ほんとだ。よし、じゃあ、クド公！」

「はい。なんでしよう」

葉留佳はクドを指名した。

「うむ。この子にクド家に伝わる秘技を披露してくれたまえ」

「ええ？いいんですか？」

「もちろん」

葉留佳は力強く頷いた。

「では。こちょこちょこちょ」

クドは風子の体をくすぐりはじめた。しかし、風子は無反応なままだった。

「……ダメです。ぜんぜん通じません」

クドは諦め、くすぐりをやめた。

「なにぃー？クド家四千年の歴史はその程度かぁー？」

「すみません」

クドは涙目で葉留佳に謝る。

「こうなったら、こうするしかない」

葉留佳はメイクセットを取り出した。

「はるちん特製メイク」

言って、葉留佳は風子に『はるちん特製メイク』をし始めた。

「やめなつて。葉留佳さん」

「止めないで理樹君。メイクアーティストとして、これだけはやり遂げないといけないの！」

結局、僕は葉留佳さんを止めることが出来なかった。

「はい。きれいにしましょうね。まずはげじげじ眉毛から」

メイクセットから油性のマジックペンを取り出し、風子の眉をげじげじ虫のように、描いていく。葉留佳さんは描きながら、自分で爆笑している。風子は依然、無反応だ。

「次は、鼻の下」

続いて、風子の鼻の下に、まるで鼻毛が飛び出ているかのように、巧妙に細工をする。

「くちびるもかわいくしましょうね」

風子の口の周りを、口紅であごの近くまで塗る。まるで口裂け女のようなのだ。

どんどんエスカレートしていく。

終いには、形容しがたい容姿になった。

「ありや。これは男か女か判断できないね」

葉留佳は自分の作品をそう形容した。

「というか、顔だけじゃ人か判別できないよ」

僕はそう告げた。

「やっぱり？」

葉留佳は悪びれた笑みを浮かべた。

「……というわけで、とつてもヒトデは可愛いのです」

突如、風子の意識が戻った。というか、彼女の時間が再び動き出したような感じた。

「あれ？どうなさいましたか？」

「はい。これ」

葉留佳は風子の前に化粧用の鏡を差し出した。

「……どちら様ですか？とても怖いです」

風子は鏡の中の、形容しがたい自分の顔を見て、萎縮した。

「……なんて恐ろしい顔でしょうか。とても人間とは思えません。いったい、この可哀相なお顔の方は、どこの誰なのでしょう？」

風子の疑問に、葉留佳は、風子に指を指す。

「？」

風子は疑問符を浮かべながら、鏡をよく眺める。

顔を右にしたり、左にしたり、髪を揺らしてみたりし、マジマジと鏡を眺めた。

「これ？もしかして、風子ですか？」

葉留佳は冷や汗を流しながら、こくこく頷いた。

風子は形容しがたい顔を歪ませ、踵を返し、歩き出した。

「岡崎さん！」

風子は岡崎の前で止まった。

背の高い、少し悪びれた印象の少年だった。

岡崎はそ知らぬ顔で、その場を去ろうとする。

「知らない人のふりをしないでください」

風子は岡崎の手を掴み、引き止めた。

「岡崎さんですよな？」

「……何のことだ？知らないな」

岡崎は目を合わせないようにしている。別に罪悪感があるわけではなく（犯人ではないのだから当然だが）風子の顔が見るに耐えないからだろう。

「とばけないで下さい。風子をこんな人外魔境な顔にしたことです」

「……もしかして、風子か？」

「もしかしてじゃなくて、正真正銘の伊吹風子です」
風子はそう主張する。

「しかし、顔が違うぞ」

「それは、岡崎さんがこんな顔にしたからです」
風子の形容しがたい顔は涙目になっているようだ。

「こんな顔では、もうお嫁に行けません。責任取ってください」

「いや。責任取れてその顔で言われても。それに俺、そんなことしてないし」

「葉留佳さん」

僕は葉留佳に自首を促す。

「ちえ。わかってるよ」

葉留佳は渋々、頷き、風子の前に行く。

「ごめんね。やったのあたし」

そう、謝罪した。

「いえ。やったのは岡崎さんです。前にも、風子がほんの一瞬気を取られている間に、男子トイレに連れて行かれたり、鼻にストローさされたり、他にも色々されたんです。こんなことするのは岡崎さんだけです」

風子は葉留佳が眼中にないように、岡崎を責め立てる。

「だから、俺じゃないって」

岡崎はそう否定した。風子はしばらく考え。

「……もしかして、ほんととはあなたがやったんですか？」

そう葉留佳に尋ねた。

「うん。そう。全然気づかないからつい面白くなっちゃって。ほんとごめん」

葉留佳は顔の前に手を合わせ、謝罪の意を示す。

「……最悪です。岡崎さん並に最悪な人がこの世にいるなんて、風子今日まで信じられませんでした」

「だから、こう謝ってんじゃん」

「謝るぐらいなら、最初からしないでください。それに、ごめんで済めば警察はいらないと、前、お姉ちゃんが言っていた気がします」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「責任を取ってください」

葉留佳の問いに風子はそう答えた。

「責任って、あたし女だよ」

「それもそうですね。じゃあ、この顔を何とかしてください」

「まあ、そこら辺は抜かりないよ。ちゃんとメイク落とし持ってきたし……あれ？」

葉留佳は自分の荷物を弄る。しばらく探してみたが、

「ごめん。忘れてきたみたい」

「……最悪です。風子にこの顔のまま残りの人生を歩めというのでしょうか。風子の人生はお先真つ暗です。暗すぎて前が見えないくらいです」

「こんなこともあるのかと！」

声と共に突如、小毬が現れた。片手に化粧箱のような箱を持って。

「前、はるちゃんに辱めを受けてから、このメイク落としを離したことはなかったよ」

小毬はメイク落しで風子の『はるちゃん特製メイク』を落とした。

「はい。治ったよ」

鏡で風子の顔を見せる。そこにはいつも通りの風子の顔があった。

「ありがとうございました」

「どーいたしまして。それに、自分の顔にいたずらされたら悲しいもんね」

「ありがとう。小毬さん」

僕は小毬さんに礼を言った。

「ううん。理樹君。当然のことをしたまだよ」

その当然のことを当然にできる小毬さんはすごいんだ、と僕は思う。

「けど、風ちゃん。はるちゃんを責めないでね。悪気があったわけじゃないと思うんだ」

小毬は風子をそう諭す。もう呼び名がちゃん付けか。小毬さんは女の子を誰でもちゃんづけする。

「……まあ。今回はそういうことにしておきます」

風子の怒気は収まったのか、穏やかな表情になった。

「それで、あなたにもこれをあげます」

風子は僕にも木彫りのヒトデを手渡した。

「僕にもくれるの？」

「はい。あなたは岡崎さんと違って、最悪ではなさそうですから岡崎というのはさっきの少年のことだろう。酷評だが、そんなに悪い人ではなさそうだが。」

「ありがとう。大切にするよ」

僕はそう答えた。

「さっきはとんだ邪魔が入ったねお嬢さん方」

さっきの金髪の男が現れた。

「また貴様か」

呆れた声で来ヶ谷。

「なんだ。真人の弟か」

と、鈴。

「俺に弟はいねえ」

「じゃあ、妹か」

「妹もいねえよ」

「じゃあ、あいつは誰だ？」

鈴は男に指を指し、尋ねた。

「僕の名前は春原陽平。古河ベイカーズのトップバッターにしてキヤッチャー、チームのキーマンさ」

男　春原は髪をさらりとなで、ポーズを決めてそう答えた。

「つまり真人のなんだ？」

「なんでもねえよ」

鈴の問いに真人はそう答えた。

「いやあ。うちの女連中と違って綺麗な人ばかりだ」

春原は女性陣を眺め、そう評した。

「そちらの女性も綺麗な方ばかりだと思いますが？」

美魚はそう訊いた。

「上辺はね。けど、中身は悪魔のような奴等なんだ。智代には蹴られ、杏にはなじられ。そのくせ、モテるのは岡崎一人。もう最悪の日々だったよ」

春原という男は自身の辛い記憶を反芻し、悲しくなってきたのか瞼に涙を浮かべる。

「……湿っぱい話をしちゃったね」

「いえ。そもそも何の話か分かりません」

美魚はそう言い切る。

「こんな男に構う必要はない。行くぞ」

来ヶ谷はそう切り出し、この場を離れようとした。

「ちよつと、待って！」

春原は呼び止める。気を引こうとしているのだろう。

「……お姉さん。大きいね」

「なにがだ？」

「おっぱい！」

春原は満面の笑みで言った。

瞬間。場が凍りつき、冷たい風と共に、沈黙した。
その沈黙は数秒続いた。

「何他校の生徒にちよっかい出してるんだ春原？」

その沈黙を終わらせたのは、女子生徒の声だった。

「智代！」

春原は驚いたように、声のする方角に振り返る。

智代という少女は長い髪に力チューシャをした背の高い少女だった。

「ふん。僕が何をしようが僕の勝手だろ」

「そうはいかない。生徒会に入る私としては生徒の素行を正さねばならない」

「へっ。今までは女だと思って手加減してたけど、今回は手加減しないからな」

春原は肩に力を入れ、特に型のない動物的な構えを取る。

「来るなら容赦しない」

智代という少女は毅然とした態度で春原を睨み返す。

「止めた方がいいんじゃないかな？」

僕は提案した。

「放っておけ」

来ヶ谷は諭すように言う。

「けど」

「理樹君。君はどちらの心配をしているんだ？」

「え？」

「彼女は相当な手練だ」

「うおおおお」

春原は雄叫びと共にがむしゃらに右拳を繰り出す。智代はステップでその拳を避け、カウンターでアッパーのように、春原の顎を蹴り上げる。春原の体が一瞬空中に浮く、その一瞬の間に智代は無数の

蹴りを放った。その衝撃で春原は十数メートル吹き飛ぶ。

「うっ……」

地面に叩きつけられた春原は何とか意識を保っているようだった。

「まーた、なにやってんのよ。あんたたちは」

春原の吹っ飛んだ先には女性がいた。

包容力のある、いかにも女性的な女性だ。

グローブをつけているので彼女もメンバーなのだろう。

「美佐枝さん！その大きな胸で泣かせてください！」

春原は涙目で女性　美佐枝さんにがばつと飛び付くが、美佐枝さんはさつと横に避けた。春原は勢いそのまま地面に突っ込んだ。

「……なぜこうなるんだ……」

地面に伏した春原は一人呟く。

「てめえ、喧嘩うってんのか？」

「むしろうつているのはお前の方だろう」

春原と謙吾がいざこざをはじめた。

「そのツンツンヘアー。その髪型は僕に喧嘩を売っているとしたか
えないね」

「これは天然だ。金髪にいわれる筋合いはない」

喧嘩の原因は髪型のようにだった。

「どうしよう。恭介、他所の学校の生徒だし、止めたほうがいいか
な？」

僕は恭介にそう尋ねた。

「うーん。そうだな」

恭介はしばし悩み。

「その喧嘩、待った」

恭介はその喧嘩を仲裁した。

「素手では、謙吾が強すぎる。竹刀を持っても、謙吾が強すぎる」

「どっちにしろ。僕弱いんだね」

「ここは公平に、バトルランキング制に則ろうじゃないか」

「バトルランキング？」

春原が知らないのは当然だ。これは僕達、リトルバスターズの仲間内だけでのルールだからだ。

僕は手短にルールを説明する。

「へー。面白そうじゃん。勝ったほうが負けたほうに称号をつけるわけね」

春原は納得した。

「まあ。いいだろう」

謙吾も納得したようだ。

恭介が携帯で連絡をすると、野次馬が周囲に集まってきた。いつも思うが恭介のネットワークはすごいと思う。

「バトルスタート」

恭介が宣言した。

「僕はいいつにするよ。ってなにこれ？」

春原が選んだのは便座カバー。

「こいつにするか。うむ、いい武器だ」

謙吾が選んだのは模造刀。本物ではないが、打たればさうとう痛い。謙吾なら尚更だ。

「なんか。すごい戦力差がない？というか、便座カバーでどうやって戦うの？」

「本来の使用方法で戦うこと」

恭介は告げた。

「ちよつとまってよ！本来の使用方法って！ねえ聞いている？」

「かたじけのうござる」

謙吾は言って斬りかかった。

「無念なりー」

春原はさういつて散った。

「そうだな。こんなのはどうだ」

春原は『語尾は常に便座カバー』の称号を得た。

「そんなないやだああああ」

春原は絶叫した。

「あの、さっきはすみませんでした」

僕達の前に髪を結った、中学生くらいの幼い少女が現れた。ただ、口調は丁寧で落ち着いていて、しっかりとした雰囲気である。

「ん。なんのことだ？」

鈴が尋ねる。

「私、春原芽衣っていいいます」

「春原。ああ、さっきのあれか？ん。苗字が同じだな。偶然の一致だろう。なにかが違う」

鈴は一人頷き納得した。

「あれは兄です」

「そうか。ということはお前はあいつの妹というわけだな」

「はい。それで兄が迷惑をかけたことをお詫びに」

芽衣は頭を下げる。

「なんか、甲斐甲斐しいな。俺もこういう妹が欲しい」

「うっさい。馬鹿兄貴」

兄は妹に罵声を浴びせられる。

「別に謝らなくていいよ。僕達迷惑してないし」

僕はそう告げる。

「本当ですか？」

芽衣は驚いたように尋ねる。

「面白いお兄さんだね」

「よく変わっているといわれます」

「馬鹿さ加減は真人と同じくらいだな」

鈴はそう評した。

「だが、筋肉は俺が勝っている」

「真人ってすぐ筋肉を価値基準に持ってくるよね」

「ふっ理樹。俺にとって、筋肉以外のモノに価値があると思うか？」

「そんなことでえばらないでよ」

僕は嘆息した。

「面白い人達ですね。あなた達だったら、兄も岡崎さん以外の友達ができそうです」

芽衣は微笑みながらそう言った。

「迷惑をかけてないならいいんです。失礼しました」

芽衣はお辞儀をし、その場を去った。

「しっかりした妹だったな」

恭介はそう言った。

「だが、兄貴は馬鹿だ。うちとそっくりだな」

鈴は独り言のようにそう言った。

「あんたは…」

恭介は知り合いなのか、長身のつなぎを着た男の前で立ち止まる。

「芳野祐助じゃないか」

「芳野祐助？」

僕は尋ねた。

「ああ。伝説的なロックシンガーだ。人気の絶頂で音楽界から身を引いた。俺に声が似てたからよく覚えている」

「…昔の話だ」

男 芳野祐助は答えた。確かに、恭介によく声が似ていた。

「なんでそのあんたが草野球に？」

「子供達の思い出を作り」

「……そうか。今日はいい試合をしよう」

「ああ」

二人は手を握りあった。

「…手を重ね、見つめあう二人。悪くないと思います」
美魚は恍惚としている。

「ん。どういう意味だ？」

鈴は首を傾げた。

「お。団体様のご到着か」

サングラスにタバコを咥えた、ガラの悪そうな男が駆け寄って来た。

「なんだ、恭介。このガラの悪いおっさんは」

真人が耳打ちする。

「聞こえてるぞ。誰がガラの悪いおっさんだ」

男は凄む。

「真人は余計なこと言わなくていいから」

僕は真人の口を塞ぐ。

「ようこそ。古河ベイカーズのホームグラウンドへ」

「こちらこそ。今回は我がリトルバスターズとの試合を承諾していただき、」

恭助は軽く頭を下げる。

「あー堅苦しいのはいい。あんたがキャプテンか？」

男は打ち切り、続けた。

「いや。こっちの理樹がそうだ」

恭助は僕を前に出す。

「よろしくな。良い試合をしよう」

「よろしく願います」

僕達は握手をし、健闘を誓った。

「……しかし、あんた良い体つきしてるな。あんたが投げるのか？」

恭助は男に尋ねた。

男には無駄な肉がなく、ピッチャーとして洗練された肉体を持っていた。

「違う違う。投げるのは俺の娘」

そういつて男はマウンドを指した。

マウンド上では大人しそうな女の子が投球練習をしていた。

球速こそないもののちゃんとストライクコースに入っていた。

ちなみにキャッチャーをしていたのはさっきの金髪の男　春原だ。

「なんていうか。女ばかりで筋肉の足りないチームだぜ」

と、真人。

「まあ。うちも同じようなもんだからね」

僕はそう言う。

「しかし、無敗のチームだ。油断するべきではない」

と、謙悟。

「渚ー！」

男に呼ばれ、マウンドから少女ー渚がこちらに来る。

「我が古河ベイカーズのエース、渚だ」

「あの、よ、よろしくお願いします」

少女ー渚は丁寧にもお辞儀をした。

「こっちが我がリトルバスターズのエースの鈴だ」

と、恭介。

「うむ。よろしくな」

「は、はい」

「じゃあ、さつさとアップしてくれ。30分後に試合開始だ」

男は僕達にそう告げた。

「秋生さん。麦茶入りましたよ」

グラウンドの端に遠足用のシートを広げ、麦わら帽子を被った女性
は男ー秋生というのだろーの奥さんのようだった。

「おー早苗。今行く」

僕達はウォーミングアップを始めた。

ランニングから始め、キャッチャボールをし、投球練習をする。

マウンドに立った鈴は振りかぶり、ボールを投げる。

良い球だ。ちゃんとストライクに入ってるし、手元でボールが伸び

てくる。

「鈴。ナイスボール」

言いながらボールを返球する。

「理樹」

鈴は僕に声をかける。

「頑張るぞ」

試合が始まる前、僕達は円陣を組んだ。

「理樹。お前がやってくれ」

「え。ああ」

僕は普段使わないような、肺活量を使い、声をかける。

「しまつていくぞ」

「おー！」

得点板にはリトルバスターズと、古河ベイカーズの名前が白いチョークで書かれていた。草野球なので五回までだ。

「これより、リトルバスターズと、古河ベイカーズの試合を始めます」

審判の男はそう宣言する。ちゃんとした審判がいるようだ。

僕達選手一同は一列に整列し、対峙していた。

審判の声と共に僕達は一礼した。

後攻の僕達は各々の守備位置につく。

キャッチャーの僕は本塁についた。

ピッチャーは勿論、鈴。

それぞれのポジションを言うと。

ファースト、真人。セカンド、クド。ショート来ヶ谷。サード小毬。ライト、葉留香。センター恭介。レフト謙悟。美魚はマネージャーなのでベンチにいる。

何球かの投球練習の後。

バッターがバッターボックスに入る。

トップバッターは春原という奴だ。

そういえばさつき自分でいったような。

春原は左打者らしく、左のバッターボックスに入った。

「ふん。その程度の球で僕を抑えられるとも思っているのかい？」

春原はこちらを挑発しているようだ。

「打てるもんなら、打ってみろ」

鈴は売り言葉に買い言葉で答えた。

「プレイボール」

審判の声が響き渡る。試合開始だ。

「行くぞ」

鈴はウィンドアップの構えをし、足を高く上げた。

「真・ライジングニャットボール」

声と共に鈴の指先から豪速球が放たれ、僕のミットに吸い込まれた。

鈴の球は走っている。捕っている僕の手が痛いくらいだ。

「ストライク！」

審判はそうコールした。

「鈴。ナイスボール」

僕はボールを返球する。

「け、けっこうやるじゃないか」

鈴の球に逃げ腰になっているのか春原の声にはさつきまでの威勢はない。

これなら見せ玉はいらない。

勝負だ。鈴。

続く二球目内角高めのストレートも春原は見逃した、いや手が出なかった。無論ストライクでツーストライク。三球目。外角低目ストレート。今日の鈴のコントロールは最初の頃には考えられないくらいに抜群だった。

春原はバットを振った。だが、バットはボールにかすりもしなかった。

「ストライクバッターアウト」

「くそっ」

春原はバットを投げ捨てるように地面に置いた。

「あんた女の子相手に三球三振？少しは粘りなさいよ」

次のバッターの杏が軽蔑に満ちた目で言う。

「うるさい。一打席目は様子を見たんだ。次は打ってやるさ」

杏は気にせずバッターボックスに入る。

僕は鈴に変化球を要求した。鈴には多彩な変化球がある。それを見せて、今後のリードを有利に進めようという思惑があった。

鈴は頷き、球を投げる。

外角低目にコントロールされたニャーブ（カーブ）だ。ストライクコースからボールになるこの球は普通打てない。

しかし杏は球に食らいつき、流し打ちをした。金属バットの甲高い乾いた音と共にボールはライトの手前に落ち、葉留香は慌てて補球するが間に合わない。記録はヒットだ。

「まっ。こんなもんよ」

杏は一塁で止まる。

普通ではないセンスだ。初めて見る変化球に反応出来るとは。こちらの思惑も外れた。

「鈴、ドンマイ」

僕はボールを返球する。

次のバッターは美佐枝さんだ。どこことなく、打ちそうな雰囲気はある。

一塁の杏は足が速そうなので盗塁またはヒット&ランもあり得る。僕は鈴にクイックモーションを要求する。

鈴は頷き、投げた。

と、同時に杏が走った。やはりそうきたか。僕は素早く二塁に投げる為、腰を上げる。

しかし、美佐枝さんはバットを振った。
エンドランだ。

強烈なゴロがセカンドの方に転がる。クドは取れず、センターの恭介が捕球。しかし投げられない。杏は既に三塁に達していた。美佐枝さんは一塁でストップ。やられた、このチームは強い。タイムを取るうかとも思ったが止めた。

鈴の集中は切れていない。鈴は本当に強くなった。

次のバッターは渚だ。大人しい印象の女の子なのでそんなに打ちそうな感じはしない。だが、四番を任されているだけあってなにかあるのかもしれない。

用心する必要はあった。

一球目。外角真ん中ストレート。見逃した。審判はストライクをコール。

二球目、外角、ボール気味のスライニャー（スライダー）渚はバットをへろへろのスイングで振った。結果ストライク。ツーストライク。

三球目。低目のチェンジアップだ。

「はっ」

渚は当てた。当てたは当てたがただのピッチャーフライだ。

鈴はしっかりキャッチ。

アウト。ツーアウト。ランナーの進塁はない。

「あうゝだめでした」

渚は肩を落とし、ベンチへ戻った。

五番バッターは智代だ。春原との格闘からもわかるように、その身体能力には目を見張るものがある。

これは注意すべき相手だ。僕は鈴にボール気味の変化球を要求した。

鈴は頷き、投げた。

外角。ボール気味のスライニャーだ。

しかし、智代は振らない。球が見えているようだ。

審判の判定はボール。小細工の通用する相手じゃない。

僕は鈴にストライクコースを要求。真向勝負だ。

「くらえ」

鈴は振りかぶった。

「真・ライジングニャットボール」

鈴から唸りをあげる豪速球が放たれる。

この球は、制球がきかない。真ん中に近いところに来た。しかし普通はコースの心配をする必要はない。この球は普通の人間の動体視力を超えている。

だが、智代はその球を打った。智代の動体視力は常人の枠を超えていた。

智代の打った球はセンターの恭介の手前で落ちる。恭介捕球し、バツクホームする。

だが、間に合わない。三塁の杏は本塁に帰還。一塁の美佐枝さんは二塁に。智代は一塁。一点取られた。

「うん。小さくてかわいいな」

一塁で智代は満足げに呟く。

「鈴……」

僕はタイムを取り、鈴に近付いた。

「どうした？理樹？」

鈴は平然としていた。点を取られ、多少動揺しているかと思っただが動揺はないようだ。

「いや。なんでもない。鈴の球は走ってる。自信持っていこう」

僕は本塁に戻り、構える。次のバッターは芳野祐助だ。見た目からして運動神経は良さそうだ。だが今の鈴ならいける。

鈴の投げた球は真ん中高め、コースは良くないが、伸びのあるストリート。甲高いバットの音がし、ボールは真上に上がった。キャッチャーの僕はその球をがっちりキャッチ。

「アウト。スリーアウトチェンジ」

審判の判定は勿論アウト。チェンジだ。

「子供達の思い出が……」

芳野祐助はうなだれた。

一回裏。僕達の攻撃だ。得点板には相手チームの得点が刻まれている。

うちの一番バッターは鈴だ。鈴は何回かの素振りの後、バッターボックスに入り、バットを構えた。

渚はおどおどした動作の後「てい」という声と共にボールを投げた。チェンジアップだ。蠅が止まりそうな球速。反ってそれは半端に速い球より打ちづらい。鈴は見逃した。

「ストライク！」

審判のコール。

「にやに…」

審判の判定に文句があるのか、不平を口にする。

「鈴、落ち着いて」

僕はそう言った。

「心配するな。理樹」

鈴はバットを構え直す。

二球目。

これもチェンジアップだ（といかこれしかないようだ）渚は「えい」と言っ球を投げた。鈴は見逃した。

「ストライク！」

と審判のコール。カウントツーナッシング。後が無くなった。

「さっきのお返しだ。君を三球三振にしとめてやる」

とキャッチャーの春原。

「お前と一緒にするな」

鈴は打席に集中する。

三球目。渚は「とう」という声と共にチェンジアップを投げた。

鈴はその球を引きつけて打った。

キン。

バットの音と共に三塁線に強烈なライナーが放たれた。

三塁手の美佐枝さんはボールに飛び付いた。だが、グローブに当てただけで取れない。弾かれたボールをレフトの芳野が拾う。

鈴は一塁で止まった。

「見たか」

一塁で鈴は小さくガッツポーズを取った。

「次は私か」

来ヶ谷が打席に入る。

「姉御くかつとばせ」

と、ベンチから葉留香がどこから持って来たのか野球応援用のメガホンで。

「姉御、姉御、姉御。打て打て姉御、姉御」

リズムミカルな応援だ。

「三枝さん。そこはお姉様の方がよろしいですよ」

と、美魚。

「えー？そう美魚ちゃん？」

「はい」

「お姉様、お姉様、がんばれ、がんばれ、お姉様」

「ええい。うるさい」

来ヶ谷はバッターボックスで一人呟いた。

鈴の足は速い。俊足といってもいいくらいだ。

ピッチャーの渚の球速から見ると、ここは盗塁をしないと勿体無い。

問題は春原の肩だが、見た目にはあまり強肩には見えない。

僕は鈴に盗塁のサインを出た。

一球目。一塁の鈴はタイミングよく走った。

「ちい！」

春原は言いながら、二塁に投げる。

思ったより肩はいいようだ。だが、球速の遅さが致命的だった。

鈴は楽々二塁に達していた。

「鈴ちゃんナイス！」

と、ベンチで葉留佳。

カウントはワンストライクノーボール。

ピッチャー、渚は投げた。

来ヶ谷は叩きつけるようにそのボールを打つ。強烈なゴロが二塁と三塁の間を襲う。

しかし、杏はなんなくそれをさばいた。一塁に送球。

タイミングは際どかったが審判の判断はアウト。

ワンナウト。二塁。

三番は謙吾だ。謙吾なら決めてくれる気がする。

初球。謙吾は見送った。

審判の判定はストライク。

「こう遅いと、返って、打ちにくいな」

謙吾は打席で呟く。

「どうした？けんごっち。俺が代打で出てやるつか」
と、ベンチで真人。

「お前はスタメンで出てるだろうが」

呆れたような声で謙吾。

「え？スタメンだと、代打出れないの？」

真人は尋ねる。

「出れないよ」

僕はそう答えた。

僕はネクストバッターサークルに入っている。

次のバッターは僕だ。真人と謙吾が「四番は俺だ」「いいや俺だ」と喧嘩するので結局僕が四番をやることになった。

二球目。渚は球を投げた。

謙吾は片手でその球をうまく打った。金属バットの音と共に、打球は高く上がり、球はぐんぐんと伸びていく。

「走れ。鈴！」

恭介の声と共に、鈴は走った。あの打球では捕球は不可能だ。

球はセンターの深い所に落ちた。智代が球を拾う。

鈴は三塁を回っている。

智代は投げた。大遠投だ。キャッチャーの春原は捕球。

「まじかよ。ノーバウンドじゃねえか」

真人は驚き、そう言った。

鈴は既に本塁に向かっていている。全力疾走だ。止まらない。

クロスプレーになる。

「へへ。アウトだよ」

ボールを持った春原は鈴をタッチアウトにしようと本塁で待ち構える。

「じゃまだ！どけえええ！」

鈴は叫び、跳んだ。

「え？・・・うああああ」

鈴は勢いそのままで、春原にとび蹴りをかました。顔面に蹴りをくらった春原は、転がり、ボールを落とす。

鈴は本塁を踏んだ。

「やった！同点だ！」

皆が歓喜をする。

春原はのびていた。不幸にも草野球でキャッチャーがプロテクターをつけていなかったためとともに鈴の蹴りを顔面に受けてしまった。顔には鈴の靴跡がついている。

「だいじょうぶ？」

小毬が春原に駆け寄った。

「心配するな。春原は不死身だ」

一塁の岡崎が言った。

「不死身じゃないやい。僕だって死ぬわ！」

春原は復活した。

試合再開。

僕の打席だ。僕はバッターボックスに入る。

謙吾は二塁だ。アウントカウントはワンナウト。

チャンスだ。

僕はバットを構える。

渚は球を投げる。

僕は見送る。

「ストライク」

審判はそう判断。

実際打席に立つと、このチェンジアップはタイミングを合わせるのが難しい。

智代の送球を見るに、守備にはあまり穴がなさそうだ。

二球目。渚はコントロールが良いようだ。良くストライクに入ってくる。

僕はチェンジアップを打った。球は高く上がり、ライトに飛んでいった。

ライトは風子だった。風子はふらふらと歩き、「えい」と言って目を瞑ってグローブを差し出した。

ぽす。

グローブにボールが入った。

「ええ〜〜!？」

捕った本人が驚きの声を上げる。

風子は「ぽわあ」と恍惚とした表情になった。

「謙吾！タッチアップだ」

恭介はそう謙吾に言った。

謙吾は進塁。三塁に達した。

次のバッターは真人だ。

「いっちょ、ホームランといくか」

言いながら、真人は打席に入り、バットを構える。

一球目。

「どうらああああ」

真人は雄叫びを上げながらバットを振る。

空振り。

二球目。

「うらあああああ」

真人は雄叫びを上げ、バットを振る。

空振り。

三球目。

「うりゃあああああ」

真人は雄叫びを上げ、バットを振る。

空振り三振。

「ストライク、バッターアウト！チェンジ！」

「今のは練習だった……。ってことにはならねえか？」

「ならないよ」

僕は真人にそう言った。

一回の裏が終わった時点で、1対1。同点だ。

二回表、古河ベイカーズの攻撃。

僕達は各々の守備位置についた。

古河ベイカーズのバッターは芽衣。

小柄な女の子なので、そんなに打ちそうには見えない。

ここはカウントを取りにいこう。

僕は鈴にストレートのサインをする。

鈴は投げた。

暴投だ。すっぱ抜けた感じで、球が反れた。

僕は捕れず、後逸した。

幸いランナーはなかったたので、ボールをカウントしただけだ。

「手が滑った」

そう言った鈴の顔には汗が滴っている。

初回の全力投球と、ホームへの全力疾走の影響もあるが、正午に近づき気温も上がってきたこともあるだろう。

「鈴！ロージン使って」

僕はタイムを取り、鈴にロージンバックを渡す。

鈴はロージンバックを何度か握り、地面に落とす。

僕は本塁で構え、ボールを鈴に投げ渡す。

鈴は振りかぶり、投げた。

二球目。これもストレート。

外角の高めに入った。

審判の判定はストライク。

「はうゝ速いです」

芽衣ちゃんには悪いがこちらも手加減するわけにはいかない。

三球目。内角高め、ストレートだ。

芽衣はバットを振った。だが完全に振り遅れた。

バットに当たったことは当たったが、バットに掠った程度だ。

ファウルボールが後ろに飛ぶ。

殆ど球威が殺されていなかったので、フライにならず、僕は捕れなかった。

カウント、ツーストライク、ワンボール。

四球目。

甘い球が真ん中に入った。

キン。

芽衣の振ったバットから快音が放たれた。

ライナーが二塁と三塁の間を襲う。

しまった、と瞬間思った。

が、来ヶ谷は目に見えないぐらいの速度で移動、ボールを処理し、

一塁にボールを送る。審判の判定はアウト。

「ま。こんなもんだよ。理樹君」

助かった、と僕は思った。

来ヶ谷さんでなければ、捕るのは不可能だったろう。

「アウトでしたか」

アウトになった芽衣はとぼとぼとベンチに戻る。

次のバッターは岡崎だ。

体格もよく、運動神経も良さそうだ。

慎重にいく必要がある。

とりあえず、変化球から入ってみよう。

鈴は振りかぶり、投げた。

内角低めのシンカーだ。

岡崎は見送った。

「ストライク！」

審判のコールが響く。

二球目。

鈴は、ボールを親指と小指だけで持ち、他の指は握り、リリースの瞬間弾くように投げた。

ニヤックル（ナックル）だ。

ランダムに変化し落ちるこの球は、低めに決まった。

岡崎は見送った。

「ボール」

しかし、審判の判定はボール。

少し落ちすぎたか。

「岡崎！振れよ！僕に続け！」

ベンチで春原が騒ぐ。

「お前に続いたら三振だからな」

岡崎は溜息を吐き、バットを構える。

「ふっ岡崎。一回の得点を叩き出したのを、一体、誰だと思ってるんだい？」

「お前じゃないからな」

「え？僕先頭打者ホームラン打ったんじゃないの？」

「打ってないからな」

言って、岡崎はバットを構えなおす。

鈴は振りかぶり、投げた。

外角、ストレートだ。

岡崎はバットを振った。だが振り遅れた。
ライトの方角へボールは飛んだが切れた。
ファールだ。

カウント。ツーストライクワンボール。

鈴は足を高く上げ、大きく振りかぶり、投げた。

「ライジングニャットボール」

ライジングニャットボールだ。

速いボールが僕のミットに収まった。

岡崎は振り遅れた。空振り三振だ。

「ストライク！バッターアウト！」

審判はコール。

「岡崎！僕に続けよ！」

「続いたろ」

岡崎はバットを置き、ベンチに帰る。

「結局、俺達は凡退か」

芳野祐介は自嘲気味に笑う。

次のバッターは風子だ。

芽衣以上に小柄な少女だ。本当にこの学校の生徒か怪しい。

あまり警戒する必要はないだろう。

風子は金属バットが重いのか、引きずりながらバッターボックスに入る。

「このバット、重いです。玩具のバットはありませんか？」

風子は尋ねる。

プラスチックのバットは割れるんじゃないかな。

そう、僕は思った。

風子はやつのことでバットを構える。

鈴は振りかぶり、投げた。

「ストライク！」

風子はストライクのコールの一秒後ほどで、やっとバットを振れた。

完全な振り遅れだ。

鈴は二球目を投げる。当然、振り遅れでストライク。
ツーストライク。

三球目。

鈴は振りかぶった。

風子は鈴が投げるより早くバットを振った。

鈴は投げた。

タイミングが合った。

浅いフライが、一塁手の真人の頭上を越え、グラウンドに落ちた。
葉留佳が捕球するが間に合わない。風子は一塁で止まる。

「風子、幼稚園のかけっこで一番になったことがあります」

一塁の風子は満足げだ。

「ついに僕の出番だね」

春原は何回かの素振りの後、左の打席に入る。

僕は鈴に変化球のサインを出す。

一打席目では直球で攻めた。ここではまだ見せていない変化球で攻めてみることにした。

鈴は球を投げた。

外角、ニャーブだ。

春原はバットを振ったが、当たらなかった。

ワンストライク。

二球目。内角のシュートだ。

春原は手が出なかった。

審判はストライクをコール。

ツーストライク。

「男なら、正々堂々真っ向勝負しろい！」

春原は不満げに吠えた。

「あたしは女だ」

鈴は答えた。

三球目。鈴は春原の挑発に乗ったのか、ど真ん中に直球を投げた。バットの快音と共に、セカンドに強烈なゴロが転がる。

セカンドはクドだ。ボールはイレギュラーバウンドし、クドの頭に当たった。

「・・・いたいです。ベリーベリーペインです」

クドは座り込み、涙目で頭を撫でる。ボールは一塁の真人が拾った。

「へへ！どうだ、見たか」

一塁で止まった春原は自慢げだ。

「あんた女の子を狙い打ちするなんて最低ね」

バッターボックスに入った杏は軽蔑の竦った目で言う。

「だいじょうぶくーちゃん？」

三塁手小毬が駆け寄った。

「・・・なんとかだいじょうぶです」

「どれ、お姉さんに見せてみる」

遊撃手の来ヶ谷も駆け寄る。

「・・・来ヶ谷さん・・・どうして服をめくるんですか？」

クドが怪訝そうに尋ねる。

「すまん。ついくせで。ところでクドリヤフカ君。お姉さんが胸を大きくする方法を教えてあげよう」

「どーするんですか？」

興味津々でクドは訊く。

「胸をあーしてこーして、こーしてあーするんだ」

「ふんふん。そーなんですか。わかりました」

試合再開。

ツーアウト。ランナー一塁二塁。

バッターは前の打席でヒットを打っている杏だ。

「ふふん。盗塁しよつかなあ」

春原はリードをした。

「二塁、風子いるからな」

と、ベンチから岡崎。

「お前靴紐、解けてるぞ」

一塁手の真人が春原の足元を見ると、靴紐が解けていた。

「あ。ほんとだ」

春原は屈んだ。

ぼす。

「え？うああああ」

鈴が牽制球を投げ、真人が春原をタッチアウトにした。

「アウト。スリーアウトチェンジ」

審判のコール。

「あんた馬鹿？何チャンスつぶしてくれてんのよ！」

アウトになった春原は杏に罵倒される。

「うるさいやい。僕だって好きでアウトになったわけじゃないやい」

二回の表。古河ベイカーズの得点はなかった。

二回の裏。僕達の攻撃だ。

「ふつ。俺の番か」

恭介は二ヒルに笑い、打席に向かった。

先頭打者は恭介、当然ランナーはない。

理想を言えば、恭介の前にランナーを溜めておきたかった。

下位打線は女の子三人だ。

正直、あまり期待できない。

恭介は打席に入り、バットを構えた。

洗練された構えだ。

文句の付け所のない、まるで野球のお手本のような構え。

昔からそうだが、恭介は何でも出来た。

当然、野球も出来た。

恭介に指示することはなにもなさそうだな。

そう思い、僕は恭介の打席を見守った。

ピッチャー、渚は振りかぶり投げた。

チェンジアップ。

タイミングの取りづらいその球を、恭介は一球目にしてジャストミートした。

キン！

金属バットの真芯に当たったその音は、今まで聞いたことがないほど、小粋の良い音だった。

恭介の打ったライナーは、レフト線に突き刺さった。

審判の判定はフェアだ。

恭介は塁上を疾走する。

レフト、芳野祐介がボールを取りに向かう。

恭介は一塁を回り、二塁に向かった。

芳野祐介はボールを拾った。

だが、恭介は既に二塁に達していた。恭介は二塁でストップ。ツーベースだ。

「なんていうか・・・流石としか言いようがねえな」

感嘆としながら、真人。

「葉留佳さん！」

僕は次のバッターの葉留佳を呼び止める。

「なあに？理樹君」

「次の打席、バントをお願いできるかな？」

二塁上の恭介を三塁に進めた方がスクイズ、暴投で一点も取れるし、場合によってはホームスチールも可能だ。今の状況ならベターな選択だと思う。

「バントおっ？あたし信用ないなあ～大きい狙わせてよ」

葉留佳は言いながら大袈裟にバットを振ってみせる。

「そこをなんとか、お願いできないかな」

「ちえゝわかったよ。バントすればいいんでしょ。すれば。ああゝホームラン打ちたかったな」

不満げに言いながら、葉留佳は打席に向かった。

葉留佳は左利きなので、左のバッターボックスに入る。

渚は球を投げる。一球目。葉留佳は見送った。

そして二球目、葉留佳はバントの構えをする。大きめにリードをしていた恭介がスタートを切り、内野陣が突っ込んできた。

「なんちって」

言って、葉留佳はバントをしていたバットを引いた。

バスターだ。

内野陣は完全に意表を付かれた。

これでゴロが転がっていたら、バスターエンドランは成功していた。

だが、葉留佳が打った打球は高く上がった。

フライだ。

「恭介！戻って！」

三塁上に達しようとしていた恭介は慌てて踵を返し、二塁に戻る。ショート、杏はフライを取った。

ボールをセカンドの芽衣に向かって投げる。

恭介はヘッドスライディング。

「セーフ」

審判の判定はセーフだ。

「ひゅう。危なかったぜ」

恭介は立ち上がった。

ヘッドスライディングをした恭介の制服は土で汚れていた。

「ちえ、惜しかったな」

葉留佳は渋々ベンチに戻る。

「葉留佳さん」

「はい。はい。私が悪かったですよ」

「ナイスプレー。惜しかったね」

僕はそう告げると、葉留佳は意外そうな顔をした。

「怒らないの？」

「葉留佳さんが一生懸命やったプレーを怒るわけないよ」

「理樹君・・・」

「敵を騙すにはまず味方からっていうしね。良い作戦だったと思うよ」

「そうですね。あたしもそのつもりでしたよ」

葉留佳は照れながらベンチに戻った。

「がんばるよあ〜」

少し間の抜けた掛け声で、小毬は打席に入った。

小毬さんはバッターなのでヘルメットをしていた。

なんていうか、女の子がバット持ってヘルメット被って打席に立つのは、似合うような、似合わないような、不思議な感じた。

「ふ。理樹君。そのギャップを萌えというのだよ」

来ヶ谷は僕にそう言った。

心を読まないでください。来ヶ谷さん。

「顔に出ているんだよ、理樹君。『小毬ちゃんの打席姿最高です。』

次はクドのが見れるのか、ひゃっほう。こいつはたまらねえぜ、ぐへへ」と

内容は合っているが、表現は明らかに間違っている気がする。

ともかく、今は試合に集中だ。

小毬さんへのサインはとりあえず出していない。

恭介の足ならボテボテでも進塁できるだろうし、次のバッターはクドだ。

ツーアウトで回ってきてても点になる確率は低い。

渚は振りかぶり、ボールを投げる。その動作は実にゆっくりで、傍

目には野球をしているようには見え、何かの演舞をしているようにも見える。

対する小毬さんのスイングも祈祷をしているような、へんてこなスイングだ。

なんとなく、二人は似ている気がする。

一球目、渚の投げた球を小毬は振った。

だが、バットには当たらず、ワンストライク。
次。

渚は振りかぶり、球を投げた。

小毬はバットを振る。球を引っ掛けた。

鈍い音と共に、ボテボテのゴロが、三塁線に転がる。

「はうあ!？」

「小毬さん!走って!」

目を白黒させている僕が言うと、小毬さんは走り出した。

あまり、足は速くないようだ。運動は得意ではないのだろう。

サードの美佐枝さんは突っ込み、ボールを処理し、一塁に投げる。

「えい!」

と、同時に、小毬がヘッドスライディングをした。

女の子らしからぬ、大胆なプレーだ。

一塁、岡崎はボールをしっかりとキャッチし、一塁ベースを踏んでいた。

対して、小毬さんは、ベースの三メートルほど手前で、うつ伏せで地面に伏せていた。

判定はアウト。ツアアウトだ。

「いだったよ」

ベンチに戻ってきた小毬は土だらけだった。

お気に入りのセーターも、土で茶色く染まっている。

「ナイスファイト。小毬さん」

僕はそう労った。

幸い、ボールがボテボテだったので、二塁の恭介は三塁に進塁していた。

小毬さんのプレーは無駄ではなかった。

「私ですか」

クドがバッターボックスに入る。小毬もそうだったが、クドも似合っているような似合っていないような、不思議な感覚だ。来ヶ谷さんが何か言ってきたが、無視することにする。

クドにどういった指示を出すかは、迷う所だ。

恭介がホームスチールをした方が、点になる確率が高い気もする。まあ、ここはクドを信じてみよう。

一球目、渚がボールを投げる。遅いチェンジアップだ。

クドのスイングもそれに負けなくらいに遅かった。

結果、うまく噛み合った。

キーン。クドのバットからは考えられない快音が放たれた。タイミング良く、真芯に当たったのだろう。

ライナー性の当たりは、レフトの深い所にまで届いた。

クドは走り出さず、ベンチに振り返り、尋ねた。

「あのどちらに走るんですたっけ？」

「なにボケかましてんのよクド公！」

葉留佳は怒声をかける。

よくよく考えれば、クドがヒットを打つのは今回が初めてなので、咄嗟のことに対応できなかったのだらう。

その間に、恭介は本塁に達していた。

だが、まだ得点にはならない。ツーアウトだ。クドが一塁に達しなくては。

「何やってんだ？能美？」

恭介が怪訝そうに尋ねる。

「ご飯を食べる時、箸を持つ手の方です」

美魚は冷静な声でそう言った。

「ご飯を食べる時・・・あ。わかりました」

クドはご飯を食べる時のポーズをし、やっとわかったのか一塁に向かって走り出した。

だが、ボールは既に外野から一塁に届いていた。

記録はレフトゴロ。スリーアウト、チェンジだ。

「はうゝすみません」

涙目でクドはベンチに帰ってきた。

「仕方ないよクド」

僕はそう声を掛ける。

まあ、今時の女の子は野球のルールもよくわからないんだろう。

それによくよく考えればクドはハーフだ。野球をしない国も多い。

結局、僕達の得点はなかった。

三回表、古河ベイカーズの攻撃だ。

僕達は守備位置につく。

「僕の番だね」

春原はそついい、打席に入った。

「お前は前の回で刺されただろ」

と、ベンチから岡崎。

「何いってんだよ岡崎・・・僕がそんなことになるわけ・・・ん？」

突如、気づいたように叫ぶ。

「うああああああ」

「邪魔よ。どきなさい」

杏は春原をバットでどかし、打席に入る。

前の打席でヒットを打っている杏だ。

ここは慎重に組み立てる必要がある。

まず僕は鈴にボール気味、インハイのストレートを要求した。

鈴は頷き、投げる。要求した通りの球だ。

杏は体を反らせ、球をよける。

審判の判定は当然ボール。

「ちえ、美佐枝さんだったら死球で出塁できたのにな」

春原はベンチでそう洩らした。

「どういう意味よ？」

美佐枝さんは怪訝そうに尋ねる。

「はは。だって、美佐枝さんはおっぱいが大きいから」

春原は軽薄に笑い、答えた。

春原がひどい目に会わされているが、特に気にしないことにしよう。

カウント、ワンボール。

見せ球はこれで十分だ。

僕は鈴にストライクを要求。球種はスライニャー。

鈴は振りかぶり、投げる。

内角高め。さつきと同じコース。

杏はさつきのインハイへのストレートが脳裏に植えつけられているのか、とつさに身を逸らす。

だが、ボールは真横に曲がり、ストライクコースに入った。

「ストライク！」

審判の判定が響き渡る。

「鈴。ナイスボール！」

僕はボールを鈴に投げ渡す。

「やるわね・・・」

いいながら、杏はバットを握りなおす。

三球目。

鈴は振りかぶり、球を投げた。

コースは内角ボール気味、球種はストレート。

杏はスライニャーだと思ったのか、手を出した。

バットの鈍い音と共に、サイドにボテボテのゴロが転がる。

杏は舌打ちしながら走り出す。

「小毬さん！」

僕は叫ぶ。

小毬さんはボールに突っ込み、素手でボールを掴み、一塁に投げる。

「アウト！」

判定は際どかったがアウトだったようだ。

「がんばったよぉ」

と、サードの小毬。

次のバッターは美佐枝さん。

春原相手にムキになっていたのか、肩で息をしながら、バッターボックスに入った。

「美佐枝さん！美佐枝さんのおっぱいぐらい大きな当たりを頼むよ！」

ベンチから、セクハラとは思えない春原の応援。

「すのほら・・・後で見てくださいよ」

バットを構えた美佐枝さんは、怒りで震えていた。

しかし、大きいな。

来ヶ谷さんとどっちが大きいかな・・・。

「少年、何卑猥な妄想をしているんだ？鼻の下が伸びているぞ」と、ショートの来ヶ谷が軽蔑の眼で。

「なんでもないよ！なんでも」

僕は慌てて否定する。

「君は純情そうに見えて、意外と助平なんだな」

この人には嘘も隠し事もできそうにない。

「まあ。理樹君も男の子ですからね。前、小毬ちゃんの着替え覗いてたし」

ライトの葉留佳が、異様に前進してきてそう言った。

「けど、あれは事故だよ」

サードの小毬は弁論。

「えー、けど理樹君、小毬ちゃんのパンツ食い入るように見てたよ。ちゃんと柄まで憶えてたし」

「私もこの前、直枝さんに押し倒されました」

と、ベンチから美魚。いつも通りの落ち着いた声だが、軽蔑の念が籠っている。

「あれも事故で・・・」

僕は釈明した。

女性陣が軽蔑の目で見る。

僕の立場が悪くなっていく。

「皆、今は試合中だよ。守備位置に戻って」

僕はそう切り出した。女性陣は渋々引き下がる。

話を試合に戻そう。

ワンナウトランナーなし。

バッターは三番の美佐枝さん。春原に心を乱されたのか、心ここにあらずという感じで打席に集中していないようだ。

僕は鈴にストライクを要求。

甘めの直球だ。

だが、美佐枝さんはそのボールを見逃した。

審判の判定はストライク。

二球目。外角のニャーブだ。

美佐枝さんはバットを振った。だがスイングに切れがない。

ボールは高く上がり、セカンドのクドがボールをキャッチした。

「わふー。やりました。初めてボールが取れました」

クドは歓喜した。ツーアウトだ。

「どうしたんだよ美佐枝さん！美佐枝さんのおっぱいはそんなもんじゃないだろ！」

ベンチに帰ってきた美佐枝さんに、春原はそう叱咤した。

「すのはら〜」

「どうしたの？美佐枝さん。そんな顔するとしわが増えるよ」

ぶちという美佐枝さんの何かが切れた音と共に、春原は悲鳴を上げた。

古河ベイカーズの四番は渚だ。

前の打席から見ると、四番というのはただのお飾りで（僕もそうだけれど）実力的にはたかが知れていた。

鈴は振りかぶり、投げた。内角のストレートだ。

渚は引っ掛けた。

ボテボテのピッチャーゴロだ。鈴はそのボールをグローブで掴み、一塁に投げた。

が、暴投だ。

ボールは背の高い一塁の真人を超え、ボールはグラウンドの隅まで転がる。

記録はエラーだ。

フィールディングの良い鈴にしては珍しい。どこか具合でも悪いのかな。

僕はタイムを取り、鈴に近づいた。

「どうしたの鈴、大丈夫？」

「なんでもない。あたしだって、ミスすることもある」

鈴はかぶりをふり、否定した。

「なら、いいけど・・・」

時刻は既に正午を回っている。気温も上がり、鈴のスタミナが心配な所だ。

僕は本塁に戻り、キャッチャーミットを構える。

五番は、智代だ。

ランナーは一塁にエラーで出塁した渚。

理想を言えば、智代の前にランナーを出したくなかった。

智代の身体能力は群を抜いている。一打席目の当たりも、真・ライジングニャットボール

でなければ、スタンドに運ばれていたかもしれない。

ランナーは一塁にいる。

敬遠はあまりしたくない。

それに、それは鈴の性格に合わないだろう。

とにかく、勝負するしかない。

僕はミットを構えた。

一打席目は打たれた。だが、今度は抑える。

鈴は足を高く上げ、振りかぶり、投げた。

勢いのあるストレートが外角に決まる。

智代はバットを振った。相変わらず鋭いスイングだ。

打ったボールはライト線を切れ、ファールボール。

二球目、内角シュート。

智代はバットを振った。少し詰まったが、伸びのある打球はレフト

線を切れ、ファールになった。

三球目。見せ球はなしだ。

鈴は足を高く上げた。

「真・ライジングニャットボール」

声と共に、鈴の右腕から剛速球が投げ込まれる。

智代はバットを振った。タイミングは合っている。

金属バットの高い音と共に、ライナーの打球が鈴を襲う。

危ない。

瞬間、僕は思った。

が、ボールは乾いた音と共に、鈴のグローブに納まった。

ボールを取った鈴は、グラウンドにへたれこんだ。

「鈴、どうしたの？立てる？」

「ああ。大丈夫だ。理樹」

鈴は僕の手を取り、立ち上がった。

スリーアウト、チェンジ。

三回表、古河ベイカーズの攻撃は無得点に終わった。

四回表、古河ベイカーズの攻撃。

僕達は守備位置につく。

バッターは六番の芳野祐介。

僕は鈴にストライクコースに変化球を要求。

鈴は振りかぶり、投げた。

しかし、暴投だ。

すっぱ抜けたニャーブは、外角に大きく反れ、僕のミットに収まらなかった。

制球が乱れてきた。

炎天下での全力投球、それにより、鈴は相当疲弊しているのかもしれない。

しかし、鈴に頑張ってもらうしかない。

僕達、リトルバスターズのピッチャーは鈴しかいないんだ。

僕は鈴にストライクコースにストレートを要求した。

多少甘くてもいい。

鈴の後ろには頼もしいバックがいる。

カウント。ノーストライクワンボール。

鈴は頷き、振りかぶった。

甘めのストレートがストライクコースに入った。
キン。

芳野祐介のバットから快音が放たれた。

ボールは外野。レフトの謙吾の手前で落ちる。

芳野祐介は一塁でストップ。

次のバッターは芽衣。

今度も僕は鈴にストライクコースにストレートを要求。

鈴は頷き、球を投げた。

芽衣は見逃した。

審判はストライクをコール。

ワンストライク。

僕はボールを返球する。

鈴はボールを受け取り、振りかぶった。これもストレートだが、ストライクコースから大きく外れた高めの球だ。

僕は立ち上がり、何とかキャッチ。

当然ボールでワンストライク、ワンボール。

三球目。

鈴は振りかぶり、球を投げた。

鈴の球は明らかに球威がなくなっていた。

あまり速いとは言えないストレートは、真ん中に近いコースに入っ
た。

芽衣はバットを振った。

キン。

強烈なライナーがショートを襲う。

だが、来ヶ谷はそれを真正面でなんなくキャッチ。
アウトだ。ランナーの進塁はない。

鈴、それでいいんだ。

僕達は、僕達だけじゃない。頼もしい仲間がいる。

次のバッターは岡崎。

今の鈴には、配球を組み立てるだけの余力はない。

僕はサインを出さず、ミットを構えた。

鈴、踏ん張り所だ。

鈴は頷き、ボールを投げる。

だが、ストライクには入らない。

内角、ウエストしたような、大きなボール球だ。

僕は何とかそれをキャッチ。

二球目。

鈴はボールを投げた。

今度は外角へのボール球。ボールはストライクコースを大きく外れ
た。

審判は当然ボールと判定。

とにかく、打たせるしかないな。

三球目。

甘いコースのストレート。

岡崎はバットを振った。

バットから快音が放たれ、ボールはショートを抜け、レフトまで達した。

謙吾はボールを捕球。

一塁ランナーの芳野祐介は二塁でストップ。

岡崎は一塁だ。

次のバッターは風子。

前回の打席はラッキーヒットだった。

このバッターは抑えなければならない。

鈴は振りかぶり、ボールを投げた。ストライクが入らず、ボールになる。

二球目。

鈴の投げた球は、真ん中に入った。

だが、風子は振り遅れ、空振り。

三球目。

鈴の投げた球は、甘いコースに入った。

しかし風子のスイングは遅く、空振り。

四球目。

鈴の投げた球を風子は遅いスイングで打った。

結果、鈍い音と共に、バントをしたような打球が転がる。

その間に二塁ランナーと一塁ランナーがスタートを切っていた。

僕は舌打ちしながらボールを拾う。

芳野祐介は既に三塁へ達しようとしていた。

僕は仕方なく、一塁に送球。

一塁はアウトだ。真人がしっかりキャッチした。

結局、進塁打となった。

ツーアウト、二塁三塁。

バッターは春原だ。

「チャンスで回ってくるのが、ヒーローの辛い宿命だね」

春原はバットを構え、そう言った。

鈴は振りかぶり、球を投げる。

暴投だ。ほとんどワンバンに近いボールを、僕は後逸しないように何とかキャッチする。

審判の判定は当然のようにボール。

「もしかして、敬遠？まあ、一塁は空いているからね。強打者の僕を敬遠したいって気持ちにはわからないでもないけど」

春原は僕にそう言った。

僕は答えず、ボールを返球する。

鈴の制球の乱れ具合は、疲労の域を超えている気がする。

僕はタイムを取った。

「鈴、本当に大丈夫？」

僕は鈴に尋ねた。

「・・・・・・なんのことだ？」

「疲れてない？」

「これだけ投げれば、普通疲れる」

「・・・・・・なんでもないんじゃないんだ。とにかく、打たせていこう。きっと、みんなが何とかしてくれる」

僕はそれだけを言い、守備位置に戻り、ミットを構える。

鈴は振りかぶり、投げた。

ボール球だ。外角に大きく逸れた。

僕はなんとかキャッチし、後逸を防ぐ。

三球目。

鈴は振りかぶり、球を投げた。

今度はストライクコースに入った。

春原はバットを振った。

快活な音と共に、ボールはライト線に高く上がった。

「決まったね。ホームランだ。はは」

いった春原は走らず、ボールを見送った。

しかし、ボールは伸びず、ライトの葉留佳はフェンス間際でキャッチ。

「どうだ。見たか」

言って、春原はダイヤモンドを一人、走り出した。

僕達はベンチに戻り始めた。

春原は一人、ホームイン。

「岡崎、見てたか？」

「ああ。お前がライトフライに倒れて一人でベースを一周した所をな」

「ええ！？僕、ホームラン打ったんじゃないの？」

「打ってないからな」

この回、僕達はなんとか無失点で切り抜けた。

四回の裏、僕達、リトルバスターズの攻撃だ。

得点は同点。そろそろ勝ち越したい。

打順は真人からだ。

真人は風切り音が聞こえてくらい激しい素振りをした後、打席に入った。

渚は振りかぶり、投げた。

前回の打席で球筋を見極めたのか、真人は十分に引き付けてボールを振った。

ボールはレフトの前に飛ぶ。芳野祐介は捕球するが、既に真人は一塁に達していた。

「惚れたかい？俺の筋肉によ」

真人は一塁で誇る。

ノーアウトランナー一塁。

「さてと。そろそろ点を取りに行くか」

ここで打順は恭介に回る。

チャンスだ。

恭介なら打つ。

恭介には常に期待に答える男だ。

渚は振りかぶり、投げた。

前回と同じ、正確無比のバツティング。

恭介はチェンジアップを完璧なタイミングで捉えた。

恭介の打った打球は、センターの深い所に達した。長打だ。

真人は二塁を回り三塁へ向かう。

恭介も一塁を回り二塁へ向かった。

まだ外野手は追いついていない。

真人が三塁を回ろうとした時。

「真人！止まれ！」

恭介は大声で真人を呼び止めた。

真人は止まる。

すると、外野からまるでレーザーガンのような返球がホームに来た。

智代だ。

恭介はこれを見計らっていたんだ。

ノーアウトランナー二、三塁。

打順は下位打線とはいえ、絶好のチャンスだ。

葉留佳が打席に入る、と。

「タイム！」

男の声がグラウンドに響いた。

秋生という、さっきのガラの悪い男だ。

「ピッチャー交代だ！」

言って男はピッチャーマウンドへ行く。

「よく頑張ったな。渚」

「・・・は、はい。お父さん」

渚という少女は肩で息をし、衣服を汗で濡らしていた。

この炎天下で投球を続けるのは、女の子には無理があつたのだろう。

女の子には無理があつた？

つてことは、鈴も。

「お前は早苗と一緒に休んでいる」

「・・・はい」

渚はマウンドを下り、恐らく母親であろう女性　早苗の所に向かった。

「渚、お疲れ様。麦茶ですよ」

渚は早苗から紙コップに注がれた麦茶を受け取った。

「ありがとう。お母さん」

「春原。投球練習だ」

秋生はそのままマウンドに立ち、手にグローブをはめた。

「ういつす」

春原は体育会系っぽく答えた。

秋生はボールを握り、大きく腕を振り上げ、トルネード投法のような、体にねじりを加えるような独特のフォームをとった。

そして、体の力全てをボールに集約したような、球を投げ込んだ。
バシィ！

聞いたミットの音がグラウンドに響き、その場を沈黙させる。

スピードガンで測れば140は軽く超えているかもしれない。

プロ級といえる。

おまけにあのチェンジアップの後だ。

余計に早く見える。

恐らく、これも考えにいった継投だったのだろう。

「やべえって、あんなの普通打てねえ」

三塁で真人は驚嘆しながら言った。

「あたしなら余計打てないよ。手加減してよ。おじさん」

打席の近くで葉留佳はそう頼んでみた。

「嫌だ」

秋生は子供っぽく答えた。

「大人気ないなあ、もう」

「次フォーク行くぞ」

秋生はボールを指で挟み、投げた。

ほぼ直角にボールが落ち、地面でバウンドした。

春原は体でボールを止める。

「よし。そうやって体で止めりゃいい」

あの球をプロテクターもなく止めるのは危険だ。

まあ・・・春原だからいいか。

「プレイボール」

審判の声が響き渡る。

秋生は独特のフォームで振りかぶり、球を投げ下ろす。

ストレートだ。ほぼ真ん中に近い所に振り下ろされたストレート。

だが、葉留佳は完全に腰が引けていた。

見送った。いや、見えなかった。

見えた時には既にミットの中に入っていた。

「ストレイク！」

審判のコールが響く。

「こわ・・・ちびりそう」

葉留佳は打席で震える。

この様子ではスクイズは無理だ。むしろランナーを憤死させるだけだ。

三球連続ストレート。

葉留佳は全球見送った。

「ストレイクバッターアウト！」

三球三振だった。

「あんなの無理だよ」

葉留佳は肩を落とし、ベンチに戻った。

「ふえ、次、わたし？」

小毬さんは尋ねた。

「そうです」

マネージャーの美魚は答えた。

「ふええええええ。怖いよおおお」

小毬は涙目になった。

「小毬さん。ファイトですよ」

クドは励ます。

「次、くーちゃんだよ」

「私も怖いです。アトムチキンです」

二人してガタガタ震える。

小毬さんはガタガタ震えながら打席に入った。ただ、バッタボックスの一番離れた、バットが届きそうもない所に立った。

当然、三球三振。

続く、クドも同様に三球三振。

三者連続三球三振。

「スリーアウトチェンジ！」

審判の声が響き渡った。

「理樹、このままじゃまずいぞ」

守備につく前、恭介は緊迫した表情で僕に声をかけた。

「鈴の異変に気づいているか？」

「・・・・・・相当疲れているね」

僕は答えた。あの制球の乱れは異様だ。

鈴だって普通の女の子なんだ。

それを僕は鈴なら大丈夫だって、過信して、無理な要求ばかりしていた。

僕は馬鹿だ。パートナー失格だ。

「あの様子では、うちは延長を戦えない」

「けど・・・、僕達も向こうみたいに、恭介が投げればいいじゃないか。恭介は僕と違って何でも出来る。恭介が投げればきつと抑えられるよ」

僕はそう恭介に訴えた。

「理樹。お前は勘違いをしている。俺はスーパーマンでもなんでもない。ただの人間だ。何でもできるわけじゃない。それに」

恭介は続けた。

「俺達、リトルバスターズのピッチャーは鈴だけだ」

「そうだね・・・そうだったよね」

何を僕は当然のことに今更気づいたんだろう。

「次の回、最終回をサヨナラで決められなかったら、俺達の負けだ。棄権する」

「そんな・・・ここまできて」

「俺だつて妹がかわいい。これ以上無茶をさせるわけにはいかない。理樹、わかるよな？」

「・・・わかったよ恭介」

僕は頷いた。僕も、これ以上鈴に無理強いすることはできない。

「鈴、大丈夫？投げられそう？」

僕はマウンドに千鳥足で向かう鈴に尋ねた。

「・・・なんだ、理樹か。どうしたんだ。そんな心配そうな顔して」

その表情、声にはいつもの覇気がない。

「あたしなら大丈夫だぞ」

その言葉が嘘だつて、僕にはわかる。

鈴は相当無理をしている。

けど、僕は、ただこう声をかけるしかなかった。

「鈴。最後だ。頑張ろう」

「・・・わかった」

鈴は試合が始まる時と同じように、僕に言った。

「理樹、がんばるぞ」

鈴は最後のマウンドに上った。

最終回 表

古河ベイカーズの攻撃は二番の杏からだ。

「岡崎、僕の次の出番はいつだ？」

ベンチで春原は尋ねた。

「もうこないからな」

「マジで？杏！」

春原は打席に向かう杏を呼び止めた。

「僕がいくよ」

「あんたは黙ってなさい」

杏はバットで春原を殴り、黙らせ、打席に入った。

鈴にはもう余力がない。

僕は鈴の投げる球を捕るだけだ。

鈴は振りかぶり、投げた。

コントロールの定まらないストレートは、外角の高めに入った。

杏は見送った。

審判の判定はボール。

二球目、鈴は振りかぶり投げる。

その球にはもはや球威は残されていなかった。

甘く入ったストレート。

それを杏は痛打した。

鋭いゴロが二塁と三塁を襲う。

しかし、来ヶ谷はボールに飛びつき取った。

そして一塁に送球。

「アウト！」

きわどかったが、審判の判定はアウト。

それでいいんだ、鈴。

僕達には頼もしい仲間がいる。

三番、美佐枝さん。

僕はミットを構える。

鈴は頷き、投げた。

真ん中に近い甘い球だ。

美佐枝さんは迷うことなくバットを振った。

鋭いバットの音。

鋭い当たりはライトへ飛んだ。

「葉留佳さん！」

僕は立ち上がり叫んだ。

「はるちんダイブ」

葉留佳はボールをダイビングキャッチ。

倒れこんだ状態のまま、取ったボールを高く上げる。

アウト。

ツィアウトだ。

「ついに俺様の出番だな」

言って、秋生は打席に入った。

そつだ。渚が交代したから四番はこの人だ。

さっきの投球を見るに、きっとバッティングも並一通りではないだろう。

注意すべき人物だが、僕に出来ることはない。

僕はただ、鈴を信じ、仲間を信じることしか出来ない。

鈴は振りかぶり、投げた。

真ん中に入った甘いストレートだったが、秋生は球筋を見極める為か、見送った。

判定はストライク。

二球目。鈴は振りかぶり、投げた。外角、大きく外れたボール球。

僕はそれをなんとかキャッチする。

三球目。ストレートが真ん中に入った。

秋生はバットを振った。

何も音は聞こえなかった。

きつと、ほんとに真芯を喰うと、それは空振りみたいに何も音がしないのかもしれない。

ボールは空に消えた。誰一人、ボールを追わなかった。ホームランだ。

古河ベイカーズのベンチが沸く。

秋生はバットを投げ捨て、ベースをゆつくりと回り始めた。
「・・・鈴」

僕は鈴に駆け寄った。

鈴は打たれたショックか、それとも疲労からか、俯いていた。秋生が本塁に達しようとした時。

鈴は地面に膝をつき、倒れた。

「鈴！鈴！」

僕は鈴の名前を叫びながら、鈴を抱きかかえる。

その声を聞き、リトルバスターズの面々が駆け寄ってきた。

鈴は僕の呼びかけに答えない。

気を失っている。

とにかく、ベンチに移さなければ。

僕は鈴を背負った。

背中には、確かな感触。

鈴も成長したな。

「少年、今はえらいこと考えている場合じゃないだろ」
来ヶ谷は呆れ顔で呟く。

そうだ。早く鈴をベンチに移さなくては。

「軽い日射病だな」

ベンチで鈴の様子を診た来ヶ谷はそう言った。

「それで、どうなの？」

僕は尋ねた。

「まあ、大事には至らんが、もう試合には出ない方がいい」
来ヶ谷はそう告げた。

「僕のせいだ。僕が鈴に無理なことを言うから。それで」

「・・・なにを言っているんだ、理樹。お前のせいじゃない」
ベンチで横になっている鈴は、言った。

「鈴、気がついたの？」

僕は驚き、尋ねた。

「あたしなら平気だ」

「嘘だ。そんなわけない。鈴は無理をしている。どうしてそんな無理をするんだよ」

「楽しかったんだ」

鈴は答えた。

「理樹と一緒に野球をするのが。皆と一緒に野球をするのが、楽しかったんだ。それを、あたし一人の事情でやめたくなかった」

「そんな・・・」

「理樹は、楽しくなかったのか？」

「・・・楽しかったよ」

「あたしは、まだ続けていたい。理樹と一緒に、野球をしたい」

「鈴。あと一球だけ投げれるか？」

恭介は鈴に訊いた。

鈴は強く頷く。

「ど真ん中に投げろ。後は俺達でなんとかする」

恭介は力強くそう言った。

何よりも頼りになる言葉だ。

「皆にお願いがあるんだ」

試合が再開する前、僕はリトルバスターズのメンバー皆に伝わるように言った。

「鈴を助けてやって欲しい」

皆は、その言葉に頷いた。

鈴はマウンドに立った。その足取りはもはやおぼつかない。

古河ベイカーズのバッターは智代。

だけど、きつと皆ならなんとかしてくれる。

鈴は、恭介に言われた通り、ど真ん中に投げた。

智代はバットを振った。

打球はセンターに飛んだ、飛距離はぐんぐんと伸びていく。

このままだとホームランになる。

しかし、恭介はそのボールを全力で追った。

そして、フェンスに足をかけ、跳んだ。

恭介のグローブにはボールが収まり、恭介はそのまま地面に落ちる。

恭介はボールを落とさなかった。恭介は言葉通りにしてみせた。

最終回裏。

僕達、リトルバスターズは古河ベイカーズに一点リードされ、最終回の攻撃を迎えた。

前の打席はクドで終わった。

ということは。

「鈴！」

僕は打席に向かった鈴を呼びとめた。

「・・・理樹」

鈴は、今にも倒れそうなのに、その瞳はまっすぐに僕を見つめていた。

僕は鈴を引き止めたかった。

これ以上鈴が無理をしたら、もしかしたら、僕は後悔することになるかもしれない。

だけど、その瞳を見たら、僕はこう言うしかなかった。

「・・・僕達には、皆が、仲間がいる。だから、鈴」

僕は、鈴に伝えた。

「僕達を信じて」

「・・・わかった。あたしは理樹を、皆を信じる」

鈴は答えた。

その言葉を、僕は何より心強く感じた。
打席に入る前、鈴は僕に言った。

「・・・理樹、勝つぞ」

「うん。勝とう、鈴」

勝てるよ。だって、僕達はリトルバスターズなんだから。

鈴は打席に入り、バットを構える。

僕はその姿を見守ることしか出来ない。

ただ、仲間達と一緒に。

秋生は振りかぶり、ボールを振り落とす。

伸びのあるストレートがミットに突き刺さる。

速い。

ここに来て、また一段と球速が上がった。

審判はストライクをコール。

秋生は春原が返球したボールを受け取る。

二球目。

これもまたストレートだ。内角高めに突き刺さった。

鈴は見逃した。

審判はストライクの判定。

追い込まれた。

三球目。

これもまたストレート、真ん中高めだ。

鈴はバットを振った。

力のないスイング、打ったというよりカットしたという感じだ。

ボールは真後ろに飛んだ。

ファールボール。

秋生は振りかぶり、次の球を投げる。

外角低め、ストレート。

鈴は振らなかった。

ボール一個分程度外れていたのか。

審判はボールと判定。

秋生はボールを投げる。

鈴はバットを振る。ボールは真後ろに飛び、ファールになる。ボールが投げられる度に、鈴はバットを振り続けた。

秋生はボール球を続けて投げ、カウントはフルカウント。

鈴は、投げられるボールに合わせて、バットを振り続ける。

その度に、ボールは真後ろに飛び、ファールになる。

今にも倒れそうなのに、鈴はバットを振り続けた。

僕達は、その光景を見守っていた。

そして、十何球目。

「フォアボール」

審判のコールが響く。

鈴が出塁した。

秋生は舌打ちし、僕達のベンチは沸いた。

鈴はしばし呆然としていた。

今の状況がわかっていないのかもしれない。

「鈴、フォアボールだよ」

「・・・ああ。わかった。理樹」

僕が言っていると、鈴は頼りない足取りで一塁に向かった。

次のバッターは来ヶ谷だ。

「来ヶ谷さん」

僕は来ヶ谷に声をかけた。

「まあ、そう期待するな。やるだけのことはやる」

そっぴい残し、来ヶ谷は打席に入った。

来ヶ谷はバットを構えた。

能力から言えば、女性内で鈴と一、二を争うだろう。

秋生は振りかぶり、球を投げ込む。

球速は今までの球に比べて遅かった。

だが、ベースの直前で、ストンと落ち、ベース上でバウンドした。

フォークボールだ。

完全にストライクコースからボールコースに入ってきている。流石の来ヶ谷も手が出ず、見逃した。

審判はストライクをコール。

あんなのどうやって打って言うんだ。

二球目、今度はストレートだ。

変化球を交えられ、球が絞れ切れていない。

来ヶ谷は見逃した。

「ストライク！」

審判は高くコール。

三球目、秋生は振りかぶり、投げた。

フォークだ。落差のあるフォーク。

来ヶ谷は前方にシフトし、フォークの落ち際を叩いた。

ボールは高く上がる。だが、高く上がっただけだ。

ショートの杏は、そのボールをキャッチした、ワンナウトだ。

次のバッターは謙吾。

「・・・謙吾」

僕は謙吾に声をかける。

「まあ、この腕でどこまでやれるかわからんが、やってみるさ」

言って謙吾は打席に入った。

左腕を怪我している為、左打席に入り、まるで真剣の居合い抜きのように、バットを構えた。

謙吾なら、きつとやってくれる。

秋生の初球はフォークだ。

落差のあるフォーク、それを謙吾は見逃した。

いや、見逃さざるをえなかった。殆ど横なぎに払っただけの、あの構

えでは、フォークは打てない。

次もフォーク。ストライクだ。

謙吾は追い込まれた。

「悪い悪い。怪我人相手に打てない球投げちまったな」と、マウンド上の秋生。

「気にするな。勝負は常に非情なものだ」

謙吾は毅然として答える。

秋生は振りかぶり投げた。

ストレートだ。

外角高め、ストライクコースに真っ直ぐがきた。

謙吾はバットを振った。いや、抜いた。

謙吾のバットからは快音が生まれ、ボールが放たれた。

あわやホームランかという当たりだった。

しかし、向かい風に推し戻され、打球はセンターの智代がキャッチ。

ツーアウトだ。

くそつ。ついてなかった。

僕は地団駄を踏む。

四番・・・僕の打席だ。

僕はバットを持ち、打席に向かう。

あんな球が僕に打てるのか・・・。

恭介が四番なら、きつとなんとかしてくれただろう。

なんで、僕が四番なんだ。

「理樹」

恭介が僕を呼び止めた。

「・・・恭介」

「お前が決める」

「え？」

「俺に頼ろうなんて思うな」

恭介は、僕に一切の甘えを抱かせることなく、そう言い切った。

「今の鈴の様子では、走ることもままならない。だから理樹、うちが勝つにはお前が決めるしかない」

恭介は、はっきりと僕に告げた。

「鈴を救えるのは、お前だけだ」

「・・・わかったよ。恭介」

僕は頷いた。いつだって恭介は僕に勇気をくれた。僕の頼れる兄貴分だ。

だけど、この打席は僕にしか打てない。

誰にも譲るつもりはない。

僕は打席に立った。

もはや一切の迷いも感情の起伏もなかった。

無心になれたのも、恭介の言葉のおかげだ。

僕は一塁の鈴を見る。

鈴は僕を見つめていた。

鈴、僕が決める。

だから、鈴はそこで見ていて。

秋生は振りかぶり、投げた。

ストレートだ。

速い。だが、球は見えている。

僕は見逃した。

審判はストライクをコール。

秋生は返球されたボールを受け取り、次の球を投げる。

フォークだ。

落差の激しいフォークが、塁上でワンバウンドして、ミットに収まる。

ストライク。

ツーストライクだ。

追い込まれた。

だけど、僕には恐れもなにもなかった。

仲間がいる。

恭介も、真人も、謙吾も、他にも皆がいて、鈴がいる。

だから、僕に恐れるものなどなにもなかった。

秋生は高く足を上げ、大きく振りかぶる。

そして、ボールを投げ下ろした。

ストレートだ。

恐らく、今日最速のストレート。

いつもの僕だったら慄き、なにも出来なかったかもしれない。

だけど、今の僕は違う。

僕はバットを振った。今の僕には自然なスイングが出来た。

空振りをしたような感覚だった。

手には球を打った時の痺れもなにもなく、目はただ青い大空を見上げていた。

僕は今、なにがどうなっているのかわからなかった。

ただ、リトルバスターズのメンバーの歓喜だけが、僕がホームランを打ったということを教えてくれた。

僕は一塁に向かった。

一塁には鈴がいた。

「・・・やったな。理樹」

「鈴もね。よくやったよ」

僕達は互いの健闘を讃えた。

「・・・もう歩けそうにない」

鈴は気が抜けたのか、そういった。

「僕が鈴を支えるよ」

僕は鈴に肩を貸し、二人で歩き出した。

二人きりで周り始めた、ゆっくりと、白いダイヤモンドを。

「・・・あたし、信じてた」

「え？」

鈴の顔は僕のすぐ近くにあった。呼吸が伝わり、体温も伝わってくる。

「理樹なら、打つて」

鈴は僕にそう伝えた。

その言葉は何もよりも嬉しかった。

僕達は三塁ベースを回った。

本塁には僕達の仲間、リトルバスターズが待ち構えていた。

「さあ、いこう、鈴。皆のところへ」

「うん」

鈴は明るく頷いた。

僕達が本塁を踏むと、皆が僕達をもみくちやにした。

「やりやがったぜー。こんちくしょー」

と、真人。

「リキー。かつこよかったのです」

と、クド。

「お姉さん、惚れてしまいそうだぞ」

と、来ヶ谷。

「やれやれ。今日の主役は理樹にとられたな」

と、謙吾。

「鈴ちゃんもかつこよかったよぉー」

と、小毬。

「直枝さん。ガラにもなくかつこつけすぎです」

と、美魚。

「もう！二人ともサイコー」

と、葉留佳。

そして。

「・・・恭介」

「やったな。理樹」

僕達はそう言って、ハイタッチをした。

「まったく。やられたぜ」

マウンドを降りてきた、秋生は悔しそうにそう言った。

「あんた、名前は？」

秋生は僕にそう尋ねた。

僕は答えた。

「・・・直枝理樹」

「あんたは？」

「栗鈴だ」

鈴は答えた。

「覚えとくぜ」

秋生はそう言い残し、その場を去った。

試合は3対2、僕達リトルバスターズのサヨナラ勝ちに終わった。

僕達は勝ったんだ。

「鈴、もつと右に寄れ。真人、お前はもつと屈め」

恭介の提案で、僕達は記念写真を撮ることにした。

僕達、リトルバスターズのメンバーは一列に並ぶ。僕の横には鈴がいた。

恭介はカメラを手に、僕達をカメラ越しに見ていた。

「せっかくだから、恭介も入ってよ」

僕はそう恭介に提案した。

「そうだな・・・あ！あんた」

「・・・僕？・・・僕に何の用？」

恭介は近くにいた春原を呼び止めた。

「写真を撮ってくれないか？」

「えー？何で僕が」

春原は不満を洩らす。

「撮ってあげなさいよ。春原」と、美佐枝さん。

「ちえ。わかったよ」

春原は渋々頷いた。

「ピント合わせてシャッター切ればいいから」

恭介は春原にカメラを渡し、僕の横に来た。

僕の横には鈴と、恭介がいる。

「じゃあ、もういい。いくよ?」

「あー風ちゃん」

春原の声を、小毬は遮った。

近くに風子がいたようだ。

「なんですか? 風子はとっても忙しいんです」

「一緒に写真に入らない?」

「・・・そうですね。せつかくですから」一緒にしよう」

風子が列に加わった。

「智ちゃんもどうですか?」

「智ちゃん? 私のことか?」

智代は尋ねた。

「はい。一緒に入りませんか?」

「そうだな。いいだろう」

智代も列に加わった。

「杏ちゃんもどうですか?」

「あたし。うーん。そーねー。まあ、せつかくだから」

杏も列に加わる。

「祐介さんもどうぞ」

「俺か。まあ、いいだろう」

芳野祐介も列に加わった。

「岡崎さんもどうぞ」

「ああ。そうだな」

岡崎も列に加わった。

「美佐枝さんも入ってください」

「まあ、そうね。入りましょうか」

美佐枝も列に加わった。

「芽衣ちゃんも入ってください」

「私ですか。いいんですか？」

芽衣も列に加わった。

「渚ちゃんもどうぞ」

「私ですか・・・その、よろしく願いします」

「渚が入るなら、私も一緒に」

「なら、俺もだ」

渚一家も列に加わった。

結局、一列ではおさまり切らず、前列と後列に分け、前列の人は中腰か、しゃがんで貰うことになった。

「なんなんだろう。この疎外感は」

春原は一人呟く。

「春原、もういいよ」

僕はそういった。

「・・・じゃあ。はい、チーズ」

春原はシャッターを押した。

こうして、僕達リトルバスターズと古河ベイカーズの記念写真が完成した。

「ち。無敗だった俺の古河ベイカーズに土がついちまった」

秋生はそう呟いた。

「無敗だったって、あんた等今まで何回戦ったんだ？」

恭介は訊いた。

「あー。前に一回」

つまり、勝率五割。

「次は負けねえぞ」

「こっちこそ。いつでも受けてたつぜ」

秋生と恭介は、腕相撲をするかのように、強く手を握り合った。

「やめとけって春原」

「なんでだよ岡崎。これから僕がモテないのは、僕の周りにいる女に見る目がないってことを証明しにいくつてのに」

「見る目があるから、お前はモテないんだよ」

「はは。岡崎。それじゃまるで僕がほんとにモテないみたいじゃないか」

春原と岡崎が、なにかやっている。岡崎が春原を止めようとしているようだ。

「これから僕がリトルバスターズの女の子をデートに誘う。岡崎、見てくれよ」

春原は言って、リトルバスターズの女子の所に向かった。

「美魚ちゃん」

春原は美魚の前で止まり、軽薄な笑みを見せる。

「嫌です」

美魚は即答した。

春原は数秒硬直したように止まった。

「まだ・・・なにもいってないんですけど」

「では、最後まで言ってください」

「僕とデートしてよ」

「嫌です」

「クドリヤフカちゃん」

春原はクドの前で止まった。

「はい。なんででしょう？」

「これから僕とデートしにいかない？」

春原は軽薄な笑みを浮かべ、誘う。

「けど、私には餌を待つに二匹の犬がいるので」

「そんなワン公放つといていいから、僕と」

春原がクドを強引に誘うとした時。

がぶ。

「あれ、なんか僕がまれたよ僕。がぶって……。っていてええええ」

春原は絶叫し、走り出した。

「ストレルカ、ヴェルカ。迎えに来てくれたのですか」

春原の逃げ出した後には、二匹の番犬がいた。

「ねえ。ゆいねえ。僕とデートしてよ」

春原は来ヶ谷をそう誘った。

「ほう。私のどこが魅力的だ？いってみろ」

「やっぱり」

春原は一瞬悩んだように間を置き、答えた。

「おっぱいかな」

「死ね」

それだけを言い残し、来ヶ谷はその場を後にした。

「葉留佳ちゃん。僕とデートしてよ」

春原は葉留佳を誘った。

「いいですよ」

「やった、ほんと？待ち合わせはいつ？」

「三万年後」

葉留佳は言い残し、その場を後にする。

「三万年後かぁ・・・僕、今から待ちきれないよ」

春原はわくわくしたような表情でいい、しばらく後で突如気づき、叫んだ。

「僕死んでるよ！」

「小毬ちゃん。僕とさ、デートしない？」

春原は小毬に尋ねた。

「うーん。けど、私これからおじいちゃんとおばあちゃんのお世話

があるの」

「そんな死に損ない放つといていいからさ。僕と一緒に」

「春原君」

小毬は怒ったように語調を強めた。

「お年寄りには敬わなくちゃいけないんだよ！」

「はは・・・、そうだよ。お年寄りには敬わなくちゃいけないよね」

春原は気圧されたように弱く答えた。

「鈴ちゃん、僕とデートしない？」

春原は鈴を誘った。

「ん。デートってなんだ？」

「デートってのは、好きな人とお茶したり、映画館いったり」

「あー。あれな。それで、どうしてあたしとお前がデートすることになるんだ？」

「ほら。僕達一緒に野球をした仲間じゃん。僕のクールなプレイに惚れちゃったりしない？」

「ないな」

鈴はきつぱりと答えた。

「くそー、いたい僕のなにがいけないっていうんだー！」

全員にフラれた春原は地面に四つん這いになり、叫んだ。

デリカシーのなさじゃないかな。

「それはな。筋肉だ」

真人は答えた。

「筋肉？」

春原は真人に尋ねた。

「こいつさえあれば、女なんてイチコロだ」

真人は、腕に力こぶしをつくってみせる。

「そうかぁ・・・僕に足りなかったのは筋肉だったのか」

「そうとわかれば筋トレだ。それ、筋肉！筋肉！」

「筋肉！筋肉！」

春原と真人、二人は『筋肉！筋肉！』という掛け声で筋トレを始めた。

「なんか、馬鹿同士で妙な友情が芽生えたようだな」

その光景を見ていた鈴はそう洩らした。

「鈴、もう大丈夫なの？」

僕は尋ねた。

「もうだいぶ良くなった。理樹のおかげだ」

「僕だけじゃないよ。皆のおかげだよ」

「・・・今日の理樹、かつこよかった」

鈴は呟いた。

「え？」

「なんでもない。なんでも」

鈴は頬を赤く染め、かぶりを振った。

「理樹、ついに見つけたぞ」

野外を探索していた恭介が戻ってきた。

「お前が打ったホームランボールだ」

恭介の手には野球のボールが握られていた。

最後に僕が打った球だ。

「ありがとう。恭介」

「これからこのボールに皆で理樹へのメッセージを書き込む。まず俺からだ」

恭介は細めのマジックペンでボールに字を書き始めた。

『やったな、理樹by恭介』

「次は俺だな」

真人がボールとマジックペンを受け取る。

『人生は筋肉だby真人』

「次は俺か」

謙吾がボールとマジックペンを受け取る。

『今度の主役は俺だby謙吾』

「はいはい。次あたし！」

葉留佳がボールとマジックペンを受け取る。

『理樹君ナイス！byはるちん』

「次は私か」

来ヶ谷がボールとマジックペンを受け取る。

『よくやったな、少年by来ヶ谷』

「次は私ですね」

クドがボールとマジックペンを受け取る。

『わふー。やったのです理樹byクド』

「次は、わたしだね」

小毬がボールとマジックペンを受け取る。

『よくがんばりました、理樹君by小毬』

「今度は私ですね」

美魚がボールとマジックペンを受け取る。

『直枝さん。お疲れ様ですby美魚』

「最後に、あたしだな」

最後に、鈴がボールとマジックペンを受け取る。

『楽しかったぞ、理樹by鈴』

そして、鈴がそのボールを僕に渡す。

ボールは皆の文字で真っ黒になっていた。

「・・・ありがとう。みんな、ずっと大切にするよ」

不覚にも僕の瞳からは、涙が流れていた。

それから、僕達はいつもの日常に戻った。

楽しくて、皆と笑って、泣いたり怒ったり。

僕達はかけがえのない今を生きている。

僕は、部屋に皆との写真と、皆からのホームランボールを飾った。

僕は忘れない。

皆と戦ったあの試合を。

きっと。

ずっと。

いつまでも。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7837m/>

リトルバスターズvs古河ベイカーズ

2010年10月10日07時43分発行